利己主義勇者と良き魔王　序章『失われた過去』

雪祖櫛好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

利己主義勇者と良き魔王　序章『失われた過去』

【Ｎコード】

Ｎ６０６６Ｗ

【作者名】

雪祖櫛好

【あらすじ】

最初から最後まで人類最強の勇者と、最初から最後まで世界最強の魔王のお話。

第一節　―1―

彼は神童と呼ばれた子供だった。
その才は街の誰よりも高く、将来は確実に魔法学の権威となるだろうと言われていた。
それは彼の両親の影響でもあった。彼の両親は魔法学者であり、その書庫で少年は幼いころから何冊もの魔法学についての本を読んでいた。
少年が十歳のある日、少年は一人で街の外に出ていた。魔法の秘密特訓である。両親を驚かせてやろうと、そう思って、秘密に魔法の特訓をしていたのである。
その時、街を何匹かの魔族が襲っていた。
恐ろしい魔族で、街の人々はたくさん殺された。
そんな時、彼は帰ってきた。
彼は魔物を見て恐怖を覚え、しかし、すぐにそれは怒りへと変わった。
魔物の傍に転がっていた死体が、自らの両親であると気付いた瞬間に。
彼は怒りに任せ、その才に任せ、魔族を殺した。
一匹は剣で。街の警備兵が魔族に立ち向かうために使い、呆気なく殺された結果、魔族の近くに落ちていた剣で。
またある一匹は魔法で。剣で殺した魔族の血を浴び、瞬間的に増加された魔力を使い、書庫で読んだことがあるだけの魔法書の知識を用いて。
そうやって、彼は魔物を惨殺した。剣で斬り裂きその血を浴び、魔法で消し飛ばしその魔力を奪い、思いつく限りむごたらしい手段で魔物を殺した。
――よくも。よくも。よくも、やってくれたな。
そんな言葉を叫びながら、怒りにまかせて、惨殺した。

魔族を殺しつくしたとき、彼の身体は魔族の血で濡れていた。
そして、街の人間の方を見た。自分はやった。仇をとったぞ。そう言うように。
だが、彼らはそれを恐怖で返した。魔族を見るときと同じ目で、彼を見た。彼のことを神童だと持て囃していた者たちですら、同じように。
彼はそれに呆然とした。自分は仇を取ってやったのに。そう思った。
しかし、彼は明晰だったがために、街を離れる決意をした。
魔法学者である両親が生きていれば、それは違ったかもしれない。だが、それはもう叶わない。この街にいれば、自分は街の人々から恐れられ、避けられるだろう。魔族と同じように見られるだろう。それ故に、彼は街を離れた。
その後、彼は一人の人間と出会った。そして、彼はその人間と共に行動するようになった。
その人間は魔法に精通しており、彼に様々なことを教えた。
魔法だけではなく、本当に様々なことを教えた。
『自分のためだけに生きろ。自分の利益を最優先とし、自分の欲望を最優先としろ。理想を追い求め、自らの幸福を追い求めろ。常に自らのことを考えろ』
『周りに期待するな。誰かがやってくれるはずはなく、それは自分にしかできない。故に、自分でしなくては、何も変わりはしない』
そんなことも彼が教えてもらったことの一つであり、それが彼の人格の根幹となった。
そのようにして、彼は決意した。
『自分のために生きる』。自分のためとは、自分のしたいこと。自分のしたいこととは、自分の願い。自分の願いは、安定した、平和な、幸福に満ちた世界で生きること。『周りに期待するな』。周りには期待しない。自分がやらなければ何も変わらず、自分しかこの世界を変える者はいない。

故に、彼は決意したのだ。
この世界を、平和にすることを。より良くすることを。
そんな世界で生きることが彼の望みであったのだから。そして、周りには期待することなどできず、ならば、自分でするしかないのだから。
そして、彼は、自分のために、世界を救うことを決意した。
そのために、魔族を殺しつくすことを決意した。

「お客さん。あんた、こんなご時世によく旅なんかに出るねぇ」
馬車の中、口元に髭を生やした男が少年を見て言った。
少年は夜空を思わせる黒髪を持っていた。中性的な容姿であり、かなり幼く見えた。事実、彼は幼く、現在まだ十四歳である。
「それも、俺のような護衛をつけて、さ。そうまでして、何か用事でもあるのか？」
「ああ。少しな」
少年はぶっきらぼうにそう言い、すぐにその口を閉じた。男はそれに何か言いたげだったが、すぐあきらめたように前を見た。
同時に、少年は突然立ち上がり、男から馬の手綱を奪い取った。
「なっ、いきなり、何を――」
そう言うのも束の間、少年は驚くほど高い技術で手綱を操作していた。馬はそれに従い、まさに導かれるがごとく右に曲がった。
直後、馬車の側面を衝撃が襲った。
「なっ、何だぁ！」
男は悲嘆するように叫び、背後を振り返った。
そこには巨大な何かがいた。黒い体表に、巨大な体躯。胴体からは牛の脚が何本も生えており、その脚に数え切れないほど眼球があった。それは一斉に男を見て、男は思わず「ひぃっ！」と情けない声を出した。
魔族がいた。それも、男が今までに見たこともないほど強大な魔族だった。

「お前程度でも倒せる奴なら任せるつもりだったが、こいつは無理だな。ったく。高い金払ったのに、これじゃあ無駄金じゃねえか」
少年はぼやきながら自分の剣を抜いた。それを見て男はぎょっとした。ただの護身用の、つまり『飾りの』剣だと思っていたが、違った。あの剣は、明らかにそんな剣じゃなかった。男も用心棒で金を稼ぐことができる程度には実力がある。だからこそわかったのだ。その少年の持つ剣がどれほどのもので、どれほどの血を吸ったのか。
「死ね、畜生が」
その言葉に触発されたかのように、魔族は自らの魔力を用い、魔法を発動した。炎が巻き起こり、少年を襲う。
しかし、少年はそれを剣の一振りで掻き消した。
「無駄な小細工なんて、戦いで使うもんじゃねぇ。魔法ってのは、こう使うんだよ」
少年は剣を持っていない方の手を突き出し、そこから魔法を発動した。炎でも雷撃でもない、ただの衝撃を。そしてそれはいとも簡単に魔族の肉体を消し飛ばした。
「なんだ、これは……」
男は驚いていた。こんな少年が、あんな魔族を倒すなど、およそ信じられることではなかった。だが事実だった。確かに、この少年は容易く魔族を倒してみせた。それは確かだったのだから。
気付くと、少年は魔族の残骸に歩み寄っていた。そして、少年はそれに手で触れ、直後、魔族の残骸が一気に萎れた。――魔力の吸引。元々の魔力量が魔族に比べて圧倒的なまでに少ない人間が編み出した技術。魔族から、その魔力を奪い取る。それにより、自らの魔力量を増やし、次の戦いに臨む。少年がしているのは、それだろう。
いや、そんなことよりも――男は思い、少年に尋ねた。
「あんた、何者だ？」
「魔王を倒す者」
少年はそんなことを当然のように言い放った。

「お前が、『魔王を倒す者』なんて名乗ってる奴かぁ？　まだガキじゃねぇか！」そう言って、椅子に座った男はがははと笑った。男は机に乗っているジョッキを手に取り、その中のビールを飲む。ごくごくと喉から音が鳴る。ジョッキから口を離すと、男はぷはぁーと満足したような息を吐き出し、げっぷをする。
「ふざけんじゃねぇよ！　お前みたいなガキが、あの魔王を倒すぅ？　こりゃあ傑作だ！　俺らはそんな御方と話しているらしいぜ！」
臭い息をまき散らし、男は大きく声を上げる。それに同調するように、周りの男ががはと笑う。
そんな中、少年は壁にもたれかかっていた。嘲笑を受けても、それに眉をひそめることすらせずに、ただ壁にもたれかかり、目を伏せていた。
「うぉいおいおいおい。なんだぁ？　魔王を倒すなんてほざいてんのに、こんなただのおっさんたちにびびっちゃってるんでちゅかぁー？」
男が大きく身を乗り出し、少年の顔に当たるか当たらないかの所でげっぷをする。それに周りの男たちからさらに大きな笑いが起こる。
「……おい」
少年が口を開き、目を開いた。そして、男をじっと見つめる。
「臭い。顔を近づけるな」
そんな言葉に、男はがはっと楽しそうな笑みを漏らし、「こいつ！　やっぱりびびってやがるぜ！」と少年に指を向け、大笑いする。それに男たちも大笑いする。
しかし、そんな中、少年を除いてもただ一人だけ、笑っていない男がいた。少年を見て、びくびくと震えて「もう止めろ。殺されるぞ」なんてことを呟いている男がいた。
それに周りの男は「何言ってんだよ。あいつなんかに殺されるわけねぇだろ」「まだあんなガキだぜ？　そんなガキが魔王を倒すだ

の言ってるんだ。そんな無謀なこと、止めさせなきゃなんねぇだろ？」「つまり、俺達がしてるのは善意からの行動ってわけだ」その言葉が終わると、男たちはまた笑う。
だが、その男だけは笑えなかった。その男は、この日、少年に護衛を依頼されていた男だった。そして、少年の力を見た男だった。
「止めろ。止めろ。本当に、殺されるぞ。一瞬だ。あんな化物、見たことがない。あんな魔物を瞬殺したような人間、見たことがない。駄目だ。あれは。駄目だ。駄目だ」
そんなことを呟き続ける男を見て、周りの男たちは肩をすくめた。こりゃ駄目だ。そんな感情を表していた。
そうこうしている間にも、少年への煽りは続く。
「僕ちゃぁん。そんなこと、不可能でちゅよぉ？　閣下なら、可能性はあるが、僕ちゃんにはできないよぉ。本当は、魔物を見ただけで、漏らしちゃうんじゃないかなぁ？」
そう言って、がははと笑う男たちに向かって、少年はきょとんとした顔で言う。
「閣下？　それは、グローリーのことか？」
「そうに決まってんだろ」
「あれなら、魔王を倒せる器じゃあないぞ。北地区だったか？　あれを奪還する時も、たいして役に立たなかった。まあ、他の奴らに比べれば根性はありそうだったが、それだけじゃあ、な。そして、そんな奴を持ち上げるだけの部下たち。あれなら、あそこにいた魔族たちのが、よっぽど優秀だったぜ。そんな団が国で最強とも謳われているなんて、本当に、どうかしてるぜ」
ふっと笑みを浮かべながら話す少年を見て、男たちは大きな笑いを上げた。
「何がおかしい？」
少年が訊くと、男が腹を抱えながら、
「いや。妄想もここまでいくと、な」そう言って、堪え切れないようにげひゃひゃと笑いを再開した。

「……お前らはいつもそうだ。今までにこの話をまともに聞いてくれた奴なんて、片手で数えるくらいしかいない」
「はぁ？　いんのかよ、そんな奴。いるなら見てみたいぜ」
ひいひい笑いながら言う男に少年は諦めたように嘆息した。
直後、少年の右手の甲に光を放つ模様が現れた。
男たちはそれに驚き、笑いを一斉に止めた。魔法によって刻まれた模様だということがわかったからだ。そして、その模様が、限定された者にしか刻むことのできないものだったからだ。
模様は少年の手の甲から浮かび上がり、宙でそのサイズが大きくなった。そしてその輝きを増し、閃光となった。男たちは思わず目を瞑り、光が消えた。
目を開けると、そこには一人の男がいた。藍色の髪。それと同じ色の瞳。身長は高く、瀟洒な甲冑を着ていた。腰には何本もの剣が携えられている。
その男には見覚えがあった。いや、正確には聞き覚えがあった。何本もの剣を用い、いくつもの領地を奪還してきた男。『閣下』と呼ばれる男とその栄光を二分する者。その誇り高い精神と、瀟洒な外見から『騎士』と呼ばれる者。
――王室直属護衛隊隊長、リスト・サージヒルド。
その男が、跪いていた。無礼にも壁にもたれかかったままの少年に向かって、跪いていた。
「なんだ、リスト。俺は忙しい。用があるなら簡潔にな」
「はい。申し訳ありませんが、至急、王宮へ来て下さい」
「理由は？」
訊ねると、リストは少し首を回し、
「ここでは、少し」
「そうか。わかった。行ってやる」
「本当ですか！　ありがとうございます！」
リストは顔を輝かせた。
「ああ。お前を寄越したってことは、それだけのことなんだろう。

じゃあ、行くぞ」
少年がそう言った瞬間、少年とリストの姿が消えた。
男たちは唖然としていた。

○　○　○

彼（もしくは彼女）は王だった。人間が付けた名前では魔族と呼ばれる種族の王だった。
彼は強く、賢かった。だが、今までに、一つだけ後悔していることがあった。
それは、人間が繁殖するのを看過してしまったことだ。
脆弱な種族だからと無視していたが、気付いた時には、世界中に蔓延っていた。予想以上に繁殖能力が高かった。
そして、人間は彼らのことを「魔族」と呼び、恐れた。それだけならば良かったのだが、なんと人間は彼らを殺そうとしてきた。むろん、彼は人間などには負けるはずもなかった。しかし、人間に負け、殺される者も存在した。魔族と一くくりには言っても、実際は様々な種類が存在する。その中で、人間よりも脆弱な肉体を持つ者が、その殺された者だった。
彼は怒り、その人間を殺し、その街を消し飛ばした。
それから数十年。
次に、人間は考えつかないような残酷なことをした。
魔族を解析し、魔法をその手に得ようとしていた。
その解析方法は、死骸の解剖であったり、生きたままの解剖であったり、様々な実験であったりした。
彼はその人間を殺した。しかしもう遅かった。
人間は、魔法を得た。
それでも彼は人間よりも圧倒的に強かった。彼が魔力を放出するだけで人間たちは塵となった。それほどには。
そして、その人間たちを殺して、彼は安堵した。もう人間たちも

懲りただろう。そう思って、人間たちを放置していた。
だが、人間は彼の予想の範疇にはおさまらなかった。その繁殖能力と学習能力の高さ。魔法の錬度は高まり、その他の技術も磨かれた。
ついには、とある人間たちが彼ですら認めるほどに強い魔物を倒したという話を聞いた時には、さすがに驚愕を隠せなかった。
それから、彼は色々と人間を調査した。結果、驚くべきことが判明した。
人間たちは、他の生物から魔力を奪うことができる。
それは驚くべきことで、驚くだけでは済まないようなことだった。人間は魔力量が少ない。故に、彼も他の魔族も放置していた。だが、魔力を奪うことができるとあらば、話は違ってくる。魔族の力はその全てが魔力依存のものだ。彼も、その魔力量が魔族の中で最も膨大であるがために王となっているのだ（無論、それ以外もあるのだろうが）。つまり、もしも人間が自分たちよりも高い魔力を得ることになれば、それは魔族の敗北を表すのではないか。他の生物から魔力を奪うことができるということは、人間の魔力量は増え続けるということ。魔物を倒せば倒すほどに、魔力量が上昇するということ。それはいずれ、王である彼すら超えるものになるという可能性が存在するということ――。
彼は戦慄を覚えた。
人間は、無限に強くなる。魔力量は魔法の使用、その他にもただ生きているだけでも消費される。だが、人間が生命維持のために消費する魔力量など、微々たるものだ。姿すら魔力で維持している魔族とは違い、人間は元々魔力にはあまり依存しない生物であったのだから。魔力とはすなわち生命力。それに依存せず、他の生物を喰らうことによって生きていっていた人間。『捕食』という魔族には考えられない方法で生を繋いでいた人間。
それが、魔力にも適用されているのだ。いや、ただの『捕食』よりも、さらに効率が良い。魔力を『捕食』した場合、それは元々の

魔族の魔力量がそのまま人間の力となるのだ。ということは、人間は、無限に強くなるということではないのか。そして、それは、人間がいずれ、全ての魔族を超える存在になるということではないのか。そうなれば、どうなるか。そんなことは、考えずとも、わかる。

そうして、彼は決心した。

人間を滅ぼすことを。

自分たちが、滅ぼされないために。

「誠に申し訳ございません！　私が……私が！　あの時、間に合っていれば……！」

豚の顔に象の耳。その側頭部には捻り曲がった角が生えている。胴体は筋骨隆々としたゴリラに似たもの。腕はその肩と肩甲骨の辺りから二対生えており、足は馬のようなものが合計七本生えている。その背には針のようなものが六本ほど突き出ており、それは極限まで小さく折りたたまれた翼である。その体躯は巨大で、7メートルはあるだろう。

そんなものが、玉座に座る人間の少女の姿をしたものの前で跪いていた。

「あれの死を、貴様のミスで防げたとは思うな。それは、あれへの侮辱だ」

玉座に座る、人間の少女の姿をしたものが優しげな声で言う。

華奢な体躯。月を思わせる髪。白砂のように白き肌。幼げな、しかし凛とした顔立ち。宝石のように紅き眼。その身体には何も身につけてはいない。

だがどんな魔族でも、それが人間ではないことはすぐにわかった。いや、魔族でなくとも――人間でも、それが人間ではないことはわかるだろう。

魔族全てを合わせたものよりも大きいといわれるその魔力量。人間であれば出せないような威圧感。その圧倒的なまでの美貌。

――『魔王』と呼ばれる者。

「……そうでした。申し訳ございません」
「我に言うな。あれに言え。だが直接は言うな。直接言うことになれば、怒るぞ、あれは」
そこでくっくっと魔王は笑いを漏らした。しかし、その笑いはどこか不自然な笑いだった。何かを堪えるような。何かを隠すような。
「あれなら、『悔いている暇があるならば、その分、魔王様に尽くせ』とでも言うであろう。故に、これからも、我に忠義を尽くせ。あれの分まで、我に尽くせ。さすれば、あれも嬉しかろう」
「はっ！」
魔王の前に跪く魔族は叫ぶようにして大声で応えた。その声の大きさこそが、忠義の証だとでも言うように。
「では、下がれ。数日、暇を与える。それまでは英気を養え」
「はっ」
その声と共に、魔族の姿は消えた。
魔王は魔族がいた場所をじっと見つめ、ふぅと長い息を吐いた。そして、自らの目蓋を押さえ、くぅっと声が漏れ出た。
「魔王様。彼がいなくなったのは、残念でしたね」
玉座の横に立つ魔族が言った。
その頭は牛と馬や羊が合わさったかのようなもの。胴から下は人間のような形。だがその色は人間にはありえない黒い紫色で、その背は蠢く腕で覆われている。脚は二本だが、その人間ならば膝に当たる部分に風穴が開いており、そこにぴゅうぴゅうと風が吹き込んでいる。体長は先ほどの魔物よりもさらに巨大。１２メートルはある。
その魔族の声で魔王ははっと我に帰り、目蓋から手を離す。
「ああ。とても残念だ。そして、同時に憤ろしく、恐ろしい。人間は、あれを倒せるまでに強くなったのか。あれは我が軍でも、百位には入る強者だぞ」
「はい。彼の管轄区は人間の国、その中でも一番の大国。それに隣接した場所でありますからね」

「そう言えば、人間は、まだいくつかの国に分かれているのか。どこまでも愚かだな」
「仕方がないのですよ。人間には、貴方様のような優れた指導者がいないのです」
「ほう。言うようになったな、シャム。昔は我に無謀にも挑んだ貴様が、そんなことを言うとはな。時代が流れるのは早い、ということか」
「あの頃のことは忘れてください。私も、若かったのですよ。こんな姿をしたものが、自分より強いはずがない。そう思っていしまったのです。……尤も、すぐにそんな思いは消えましたがね」
「当然だ。貴様ごときに、我が負けるはずがなかろう」
「仰る通りで」
二人はくっくっと笑う。
「さて、それでは対応を考えようか――将軍。誰でもいいから、来い」
魔王が言うと、即座に四体の何かが玉座の前に現れた。
「第七、エレクトロ、此処に」
荘厳とも言える声を発したのは、体長三メートルほどの黒き魔族だった。犬のような体躯を持つが、その顔には紅き眼が二対あり、その四本の脚にも同じように二対ずつ紅き眼がある。黒き体毛の中で、尾の先だけが灰色で、そこからどろっとした何かが絶えず空気中に放出され、すぐに霧散していっている。
「第十三、チャイオニャ、此処に」
どこか不自然に高い声を発したのは、体長５０センチメートルにも満たない魔族だった。眼球とそれを守る皮膚。それだけが宙に浮かび上がっていた。皮膚は黒く、瞳は黄色。眼球を覆う皮膚には血管のようなものが張り巡らされており、それは常に脈打っている。
「第十六、コラプス、此処に」
聞き取りにくいほど鈍く重い声を発したのは５０メートルはあるこの部屋ですら収まりきらないが故に、身体の上一部だけを転移さ

せている魔族だった。それは赤黒い岩山のようなもので、そこに小さな穴が二つ開いている。ごつごつとした身体からは絶えず黒い蒸気が立ち上っている。

「第二十ピーピリープリー、此処に」

可愛らしいとも言える声を発したのは、体長1メートル半くらいの魔族だった。その姿は魔王と同じく人間のそれに似ている。人間の雌の成体に似たその姿はだがしかし、人間とは違うところがあった。魔王とは違い、衣服を着用している彼女（もしくは彼）だが、その隠された部分にはびっしりと模様が刻まれていて、それは常に暗い光を帯びている。目の色は人間とは逆で、瞳の黒と強膜の白がひっくり返っている。髪は肩ほどまで伸ばされた紫色。肌は魔王と同じく白い。

そんな者たちが。一斉に玉座の前に現れた。

「貴様達に任を与える。詳しくはシャムに聞け。我はこれより、仇討ちへと赴く」

「魔王様直々に、ですか？」エレクトロが確認するように訊ねる。それに魔王は首肯し、「我が行かなければなるまい。あれは、良くやってくれた。だから、その弔いだ」

そうして、魔王は玉座から立ち上がり、トンと床を蹴った。すると、魔王の身体は重力などないように浮かび上がる。

「では、此処は任せた」

「御意」シャムが魔王に向かって頭を下げる。

直後、魔王の姿が消えた。

「……ふむ。まだこんなものか」

魔王は多くの人間がいる場所にいた。そこには幾つかのテントのようなものが張ってあり、鎧を着た男たちが動きまわっている。

現在、魔王は衣服を着用していた。できるだけ不自然にならぬよう、偶然見かけた少女と同じような衣服を創造し、それを着用していた。それは黒いローブのようなものだった。首から足まですっぽ

りと魔王はそれに収まっていた。
「さて、まずは此処の君主に会おうか」
呟き、魔王は魔法を発現させ、そこらに歩いている兵の頭の中を閲覧する。情報＝君主、『閣下』、最も大きいテントに存在、倒してはいない――魔王は首をひねった。魔族を倒してはいないとはどういうことなのか、と。あれを倒したのは此処の君主ではないのか、と。
魔王はその他の兵の頭も覗いたが、それは変わらなかった。だが、それにはあまり気をかけなかった。どうせ、此処にいる人間は全て殺すのだ。何も変わりはない。
なら何故、魔王はわざわざ情報収集などをしたのか。それは、あれを倒した者がどんな者なのか、それを見たかったのだ。どういう戦いをしたのか。それが見たかったのだ。彼がどうやって死んだか――否、最期をどうやって生きたのかを。
しかし、それも見ることは叶わぬらしい。魔王は残念ながらも、それを見ることは諦めることにした。元より、最期をどうやって生きたのかは見たかったが、どうやって死んだのかは見たくはなかったのだ。あれも、我にそのような姿を見られたくはないだろうからな。と魔王は思った。
そして、魔王は早速、することにした。
復讐という名の弔いを。

「くそっ！　どうなっているんだ！」
その拠点の最も大きいテントで男は叫ぶように言った。金髪碧眼。二十五という若さにして将軍の地位に昇りつめた天才。『閣下』と呼ばれる男だった。
「閣下！　早く逃げてください！　現在の装備では、とても勝つことはできません！」
「却下だ！　此処にはもう、私たち以外の人民もいるのだぞ！　それなのに、私だけがのうのうと逃げるわけにはいかん！」

「ですが、閣下の命と平民の命では……」
　それに『閣下』と呼ばれる男は部下を睨みつけ、
「同じだ！　否！　私よりも人民の命の方が重い！　戦で死の覚悟をした私たちと、そんな覚悟もない人民。そのどちらかと問われれば、死を覚悟している者が死ぬのが道理だろう！」
「しかし、閣下……」
「くどい！　確かに、一昔前までの私ならば、我先に逃げかえっていただろう。しかし、今やそんなことも言えまい。あんな少年でさえ、あれほどの魔族に打ち勝ったのだ。それなのに、貴様たちは報告を捻じ曲げ、私が討伐しただのと……。私たちは、何もできなかったではないか！　あの少年の戦いを見ているだけだった！　そんな醜態を、もう晒すわけにはいかない！」
「それは……」
「まだ何か言いたいのか！　良く思い出せ、あの少年の言葉を。思い出したか？　『お前らが最強だなんて、この国も終わりだな。俺一人のが、この国の全軍よりも強いんじゃないのか？』。ただの少年に、そう言われたのだぞ。情けないという感情を込められて。憐れみという感情を込められて。諦めという感情を込められて。そんな感情は、もうあの少年には抱かせない。国民には抱かせない。そう誓ったはずだろう？　少なくとも、私は誓った。王と、我が心に。故に、もう逃げるわけにはいかないのだ。私たちは、戦い、勝たなければならない。国民の英雄でなければいけないのだ」
『閣下』の言葉に、部下である男は口を塞ぐ。そして、重々しく、頷いた。
　それに『閣下』は「よし」と言い、大きく声を張り上げた。
「これより、急遽襲撃してきた魔族への対策を即急に練る！　まず第一に、近辺に住む人民を退去させろ！　強制でもかまわん。転移魔法を使ってでも退去させるのだ！　次に、魔族を撃退する。それは人民を逃がした後だ！　では、編成を行う――」
　言っていると突然、彼の背後で爆炎が舞った。テントが燃え、そ

こから一人の少女が悠然と歩み寄って来た。魔族だ。すぐにそれは理解できた。存在が違い過ぎた。

「貴様が此処の長か。魔力量は貧相なものだが、中々良い目をしている」

少女の姿をした魔族は顔に少しだけ笑みを浮かべ、『閣下』へと手を伸ばした。「貴様っ！」と部下がそれを防ごうと、魔族へ向かって自らの剣を振った。すると、剣に刻まれた模様が光り、その模様に付加された魔法が発動する。剣の軌跡から風の刃が飛び出し、魔族へと向かう。むろん、それはただの風ではない。魔法により創りだした風。魔力付加によりその威力を極限にまで高められた刃だ。

だがしかし――やはり、それは魔族には全くと言っていいほどに効果がなかった。魔族はそれに目も向けなかった。確実に直撃した。だが、魔族は傷一つない。

そして魔族は『閣下』に伸ばした手を下ろし、妨害魔法か、と呟いた。

「貴様ではなさそうだが、それだけの使い手が、人間にはもういるのか」

魔族は自らの顎に手を当て、思案するように言う。自分たちが眼中にないようだった。それに苛立ちはしなかった。ましてや安堵してしまっていた。その事実にこそ、苛立った。

どうした。倒せ。目の前には魔族がいる。倒せ。立ち向かわなければいけない。今こそ剣を取れ。魔法を使え。その肩書きはなんなのだ。『閣下』と呼ばれた肩書きは。そう呼ばれているのは何故だ。それを考えろ。先ほど自分で言ったばかりだろう。逃げてはいけない。立ち向かうのだ。勝つのだ。戦い、勝つのだ。英雄でいなければいけない。自分たちは英雄でいなければいけないのだ。国民の英雄でいなければ。希望でいなければいけない。国民に不安ではなく安堵を与えなければいけないのだ。そのためには、勝たなければ。生き残らなければ。戦え。剣を取れ。戦え。魔法を使え。戦え、戦え、戦え――

「おおぉっ！」
叫びながら『閣下』が剣を鞘から抜き放ち、同時に魔法を発動する――剣に込められた魔法ではない、自らの魔法。停止魔法。一定の範囲の空間を対象として停止させる魔法。空間ごと対象を停止させる魔法。『閣下』がそう呼ばれる理由の一つ。これだけ高位の魔法を扱える人間は、魔法に研究が未だあまり発展していない現代では、一握りしかいない。
それを見てすぐに部下たちも自らの武器を取り出し、魔法を扱える者はその準備をする。魔法には少しの準備を要することが多い。それが高位の魔法であればあるほど、その時間は長いと言われている。魔法とは糸を編むようなものだ。ある人間の言葉が思い出される。魔力と言う糸を編み、魔法を形成する。その喩えは言い得て妙だと思えた。確かに、その通りだ。高位の魔法であれば、その難易度は上がり、焦ってしまえば失敗してしまう。それは確かに、糸を編むことに似ている。
彼らは魔力を編み、魔法を発動させる。雷、炎、水、氷、風。そんなものが一斉に魔族へと向かう。
――と。
「人間如きが空間停止魔法を扱えるとは少々驚いたぞ。だが、この程度の錬度では、まだまだだな」
そんな声が聞こえた。
誰の声か。そう思った。しかし本当はわかっていた。ただ、それを信じたくないだけで。
魔族の声だ。
魔族は停止魔法がないかのように口を動かし、軽く手を払った。すると、それだけですべての魔法がかき消された。
驚きのあまり何も言えなかった。そして、驚いている余裕などなかった。
「最早、貴様らから得られる情報はなさそうだ。知っていたとしても、妨害魔法によってその情報は得られん。だが、収穫はあった。

人間に、空間停止魔法はまだしも、妨害魔法を扱える者がいるとは思わなかった。空間停止魔法は物理的な、物質的な魔法だが、妨害魔法は情報的な、概念的な魔法だ。
人間がその領域に至ったことを称え、貴様らは苦しまず殺してやろう。喜べ。魔王直々に殺してやるのだ。これほど光栄なことは、ないだろう？」
その言葉とともに、魔族の身体から途方もない魔力が溢れ出していることが感覚された。同時に、その言葉自体に驚いた。
「魔王、だと？」
思わずそう口に出していた。魔族はそれに笑みを浮かべながら、「然り」と言った。
魔王。
人類の最大の敵。魔族の長。ただ一人だけで、魔族の総戦力の半分以上を占めるといわれる者。
その事実を確認した瞬間、そこにいたすべての人間が魔王へと襲いかかった。
魔王に恐怖は抱かなかった。ただ怒りを抱いた。殺意を抱いた。こいつさえ殺せば。殺してやる。殺してやる。殺してやる。そんな思いに塗りつぶされた。
直後、その視界が白に塗りつぶされた。
虚無に塗りつぶされた。

第一節　―2―

「久しいな」
少年とリストが転移すると、玉座に座る男が声を発した。
「ああ。久しぶり。で、用件はなんだ？」
男は緋色の髪に白色の肌。巨大とも言える身体を玉座に収め、悠然と構えている。
「北地区が消滅したらしい」
淡々と言う男の言葉に、少年は少しだけ驚いた。そして、得意そうに言った。
「だから、俺の言う通りにして良かっただろう？」
それに男はかっかっと笑い、
「ああ。貴公の言う通りにして良かった。おかげで人民を失わずに済んだ」
「だろ？　だから、早くグローリーを出せ。直接訊いた方が早いからな」
「わかっている。来い、グローリー」
男が言うと、一人の男が扉から現れた。金髪碧眼。グローリーという男だった。
「よお。久しぶりだな『閣下』様」
「からかうな、無礼者。私は貴様を尊敬してはいるが、同時に嫌悪している。特に、その無礼さを！」
グローリーは声を荒げ、少年に指を突きつける。それに少年はやれやれといった調子で、
「俺はお前の、その素直なとこ、けっこう好きだぜ？　それに、俺は別に無礼じゃないと思うが」
「どこがだ！　たった今、貴様は陛下にそんな口調で話しおっただろう！」
「陛下っつっても、俺からすればただのおっさんだからな。いや、

『ただの』ってのは間違ってるか。正確には、『有能な』おっさんだな」
「それが無礼だと言っているのだ！」
「なんで王如きに俺が敬語で話さなきゃいけないんだよ」
「王、如きだと……」
それにグローリーは驚き、唖然とする。しかし、玉座に座る男は豪快に笑った。
「貴公はやはり面白いな！　そして、強く、頭も良い。どうだ、やはり余の下に就かぬか？　望む物があれば、出来る限り取り揃えよう」
「却下だ。誰かの下に就くなんて、まっぴらごめんだ。ただ、望むものをくれるって言うんなら、グローリーとリストを寄越せ。こいつら二人は、鍛えれば魔王討伐に役立つかもしれないからな」
「却下だ。こ奴らは余にとっても宝のような者だからな」
「なら、交渉決裂だな。最初から、交渉なんてないようなもんだったが」
「いや待て。余の下に就くというのなら、グローリーとリストをくれてやってもいいぞ？」
「あんたの下に就くって時点で却下だ。確かにこいつらは惜しいが、それほどじゃあない。
……本音を言えば、あんたもけっこう欲しいんだがな、陛下殿？
あんたのその魔法の才は、グローリーくらいなら軽く超える。実際、魔法を使えば、グローリーとリストが両方襲ってきても瞬殺できるだろ」
「それは貴公も同じことだろう。いや、貴公ならば更にその上を行くか。まず、襲うという感情を抱いた時点で死んでおるだろう」
「それは過小評価し過ぎだ。俺なら、そんな感情は抱かせない。グローリーも口ではこんなこと言ってるが、実際は俺を襲う気なんて、これっぽっちもないだろうさ。俺の戦いを、実際に見たんだから」
それにグローリーは「くっ」と悔しげに息を漏らした。図星だっ

たようだ。
「やはり、貴公は惜しいな。いずれ、手に入れてみせよう」
「不可能だ。あんたの器は一国の王にはふさわしいが、俺を収めるには小さすぎる。どうしても欲しいのなら、この世界の王となってから言え。そうすれば、考えてやらんこともない」
それに男――王はその顔に貪欲な笑みを浮かべ、
「元より、そのつもりよ」
と言い放った。少年は苦笑しながら、「そうだろうな。あんたは、それを望むだろうと思っていたよ。誰よりも欲深いだろうからな、あんたは」
「貴公に言われるとはな。魔王を倒す者よ」
そうして少年と王は二人で笑った。
すると、グローリーが憤慨しながらも陛下が笑っていらっしゃるから口を出すに出せないとでも言うような顔をしているので、少年はグローリーに声をかけた。
「おい、グローリー」
グローリーは一瞬顔を輝かせ、すぐにしかめた。
「表情がころころ変わる奴だな。まあいい。見せてもらうぞ」
そう言って、少年はグローリーの方へ手を伸ばした――同時に、グローリーに強烈とも言える既視感が襲った。どこで見た。最初にそう思った。そしてすぐに答えは出た。魔王だ。魔王がした動作と同じだ。
グローリーがそんなことを思っていると、少年は大きく舌打ちし、伸ばした手を下げた。
「妨害魔法とか、俺への当てつけかよ。しかも、無駄に器用なことしやがって……」
少年が苛立ったようにするのを見て、しかしグローリーはそれどころではなかった。どうしても訊きたいことがあった。
「貴様、今のは、何だ？」
「相手の記憶を見る魔法だ。お前も魔王にやられただろうが。それ

ぐらい気付け」
『魔王』。
その言葉に、リストは驚愕に目を見開かせ、王は少し目を細めた。
「どんな姿だったのですか！」
珍しく声を荒げ、リストが言う。それにグローリーは答えようとした。しかし、応えることができなかった。どうしてか魔王の姿が思い出せなかった。魔王と出会い、自分が殺されかけたことは鮮明に覚えている。だが、魔王の姿だけがはっきりと思いだせなかった。
その瞬間、グローリーは恐怖を覚えた。魔王の姿が思い出せないことだけではない。その事実に、今まで全く気付かなかったことに。聞かれなければ、おそらく自分は魔王のことすら口にはしなかっただろう。そんな自分に恐怖を覚えた。どうしてしまったのか。強くそう思った。
「リスト。こいつは魔王の姿を覚えてはいない」
「何故ですか！　何故、そんな重要なことを……」
「妨害魔法。情報――つまり概念とか、そういう抽象的なものを改竄する魔法によって、だ。自分の存在を隠蔽するための魔法。自分のことを言えなくする魔法。簡単に言えば、自分に関する情報を誰かが得ることの一切を妨害する魔法だ」
その言葉にリスト、グローリーは驚愕し、すぐ納得した。王は最初から納得していた。
何故そんなことを知っているのか。最初にそう思い、だがすぐに、少年なら知っていてもおかしくはない、と思ったのだ。少年は全ての能力が他の人間を圧倒して余りあるほどに高く、それは知識の量も例外ではなかった。特に、魔法に関しての知識は。
グローリーの停止魔法も、少年の知識がなければあれほどまでの高みには至らなかっただろう。むろん、少年と出会う前からグローリーは『閣下』と呼ばれるほどの技術を持っており、空間停止魔法も扱えた。しかし、その発動まではかなりの時間が必要だった。
『魔法とは、糸を編むようなもの』。

これは少年に教えてもらったことだった。少年も人から教えてもらったと言っていたが、初めて聞いた時は、成程確かにその通りだ、と思ったものだ。

そして、少年は色々なことを教えた。自らの知識、技術、それを惜しげもなく教えた。

結果、グローリーに魔法発動スピードが格段に上がった。糸を編むという喩え。魔力を編み、魔法を発動する。そのようなイメージが――何のイメージも持たず、ただ理論的に組み立てていた魔法に、はっきりとしたイメージを持つことによって、その発動までの時間が短縮されたのだ。何のイメージもなく、ただ理論的に組み立てるよりは、イメージを持って、感覚的に編んだ方が早い。いや、正確には、理論と感覚の二つを利用することによって効率を上げているのだ。単純に二倍のスピードではなく、理論と感覚は相互に影響し、循環し、スピードは途方もないほどに上げられる。現に、グローリーの空間停止魔法はそのやり方をするまで――つまり、ただ理論的に組み立てていた頃は十分などという時間がかかったが、今では十秒もかからない。

ただ糸を編むという喩えだけでこれほどまでに変わるものかと最初は疑問に思った。

しかし、少年曰く、

『魔法自体、元々は感覚的なものなんだ。理論で組み立てるのは間違っているとは言わないが、効率的じゃない。そうだな……例えば、お前は身体を動かす時に理論的に動かすか？　逐一どうやって身体を動かしているのかを考えて、その理論を組み立てて動かしているか？　そうじゃないだろう。身体を動かすのは、感覚的なものだ。理論で考えていては、逆に難しい。まあ、魔法に関しては理論を理解するのも必要と言えば必要だがな。理論を理解していれば、「理論」という明確なイメージが自分の中に確立され、それを基に魔法を構築することが可能になる。それに「編む」というイメージを合わせることによって、スピードが早められる。

つまり、「理論」によって人間は魔法を構築することが可能になり、「感覚」によってそのスピードが早まる。本来、魔法は人間の能力ではなく、魔族の能力だ。そのため、「理論」はやはり必要だ。しかし、理論だけでは構築速度が遅い。魔族は生まれつき魔法を扱えるんだから、感覚的に使えて、そのスピードは理論なんて目じゃないほどに早い。しかし、人間も理解さえすれば、感覚的にもすることが可能なんだ。「理論」と「感覚」。その二つこそが人間の能力だ。どちらも使って、初めてその真の能力が発揮されるってわけだ』

ということらしい。

その後に、理論で考える利点について、『新たな魔法を習得する時は人間の場合、理論的にした方が良い』などを挙げた。

その説明は、十四歳という若さを考えずとも、素晴らしい説明だった。この年齢でここまで魔法に精通していることは異常とも言えたし、この国では魔法学の一人者でもあるグローリーやリストにとっても目から鱗が落ちるような発想だった。少年はおそらく、この国の誰よりも魔法に精通していた。誰よりも知識を持ち、さらに、誰よりも強かった。

少年とグローリーが出会ったのは、少年がまだ十三歳の頃だ。

グローリーはその時、北地区の奪還作戦に出撃していた。魔族によって占領された北地区。その奪還作戦。

数百もの選び抜かれた猛者たちを連れ、グローリーは北地区に向かい、到着した。すると、そこには幾つもの魔族の死骸。そして道端にうずくまって奮えている人々がいた。

グローリーがそれを不思議に思った瞬間、グローリーの眼前に巨大な紫色の肉塊が降って来た。それは地に落ちるとともに弾け、同時に紫色の煙となった。

それが何処から降ってきたのかを探るため、グローリーは首を回した。

すると、いた。頭上に。空に。

そこには巨大な体躯をさらに巨大な六対の翼で浮かばせる魔族が

いた。紫色の体表。中心に球状の胴体があり、そこからそのサイズからすれば小さな数え切れないほどの数の脚と、巨大な六本の腕が生えており、六本の腕は途中で裂け、そうやって裂けた腕がさらに裂け、それがさらに裂け……といったように無限に分かれ裂けている腕。その翼には数百の深緑色の眼球。胴体の真ん中がぱっくりと割れており、それは口のようだった。牙のようなものが生えており、大きな舌が見えた。その奥にはぐつぐつと煮えるマグマのようなものがあり、それは度々口からはみ出し、落ちてきた。

そんな魔族の、一部分が抉り取られていた。胴体の一部分。そこからはどろっとした橙色の液体が滴っており、それはおそらくこの魔族の血だった。

そして、先ほどグローリーの眼前に落ちてきたもの。それこそが、あの魔族の抉り取られた部分。それは容易に予想できた。

しかし、どうしてもわからないことがあった。これは、誰がやったのか。

そんな疑問はすぐに解消され、次に不信が湧いた。

一人の少年が浮遊していた。

黒髪の少年だということと、かなり幼いということだけは確認できた。そして、一振りの剣を持っていることを。

この少年に違いないと思い、同時にそんなはずはないと思った。

その思いもすぐに消えた。

少年が剣を振るい、直後、魔族の六本の腕が少年に向かった。魔族の腕が少年に至る前に、魔族の胴体が上と下に分断された。しかし、魔族の腕は止まらず、少年に向かう。少年はそれは手を向け、かと思うと、魔族の腕は跡形もなく消滅していた。それに驚く暇すらなく、魔族はその口を大きく開き、そこから極度の高温により赤を超え、白くなったマグマのようなものが噴出した。粘性が高く、触れたものを融かすようなそれは少年に降りかかったが、少年はそれを軽く腕を挙げると同時に発動した魔法によって掻き消した。直後、少年は魔族の胴体の上に立っていた。少年は剣を振り、翼が全

て切断された。魔族の身体が少年を包み込むように変形し、だが少年は思い切り魔族の胴体を蹴り、それを阻んだ。少年の蹴りだけで魔族の身体は木端微塵になり、霧散する。すると、少年が顔をしかめ、次の瞬間、魔族の切断された翼を追っていた。その翼にある眼は一斉にぎろりと少年に目を向け、そこから光線が射出された。少年はそれを無視するように剣を振るい、すると魔族の翼は跡形もなく消し飛んだ。

一瞬の勝負だった。

そのようにして、少年の強さを知り、だが、やはり信じ切れはしなかった。信じることなど、できなかった。

少年はゆっくりと地に降り立ち、グローリーの方に歩み寄って来た。グローリーたちは皆武器を構えた。すると、少年は驚いたように目を開いた。

「へぇ。あれを見て、まだ俺に剣を向ける、か。度胸あるな、お前ら」

少年は笑みを浮かべた。そうして見ると、少年はやはりかなり幼かった。外見は、十から十四くらいのように見えた。しかし、その目だけを見れば、とてもじゃないが十や十四には見えなかった。おそらくはこの国でかなりの経験を積んでいる自分を圧倒するほどに修羅場をくぐり抜けていることがわかった。

「……貴様、名は？」

グローリーは思わず訊ねていた。それに部下たちがざわめいた。グローリーが名を訊ねるということはそれほどまでに珍しかった。その能力を認めた者以外には、絶対に名を訊ねなかったからだ。

少年は少し考えたそぶりをすると、薄く自嘲めいた笑みを浮かべ、言った。

「魔王を倒す者だ」

――これがグローリーと少年の出会いだ。

この後、少年はグローリーと共に城へ行き、王と謁見した。その時にも少年は自らの態度を正さず、グローリーはその度に「無礼な」

と憤慨した。
そして、少年はグローリーたちに自らの知識を授けた。
それから、少年は城から離れ、旅に出た。グローリーは北地区へ赴き、街を建て直すことにした。
そんな時、魔王が現れ、北地区を滅ぼした。
そこまで思い出して、グローリーは思った。魔王が現れたことは覚えている。それは何故だ、と。
「魔王の性格が悪かっただけだ」勇者がまるで心を読んでいるように口に出した。「あいつ、わざと魔王と言う名だけは覚えておくように調整したんだよ。そうして、自分はそれほどの魔法の使い手なのだ、と見せつけるためにな」
「誰にですか？」
「俺にだ。というより、それ以外には考えられない。あそこにいた魔族を殲滅したのは俺だし、その時妨害魔法を使っていたのも俺だけだからな」
「……お前も、妨害魔法とやらが使えるのか」
「当然だろう。そうじゃなきゃ、どんな魔法かなんてわかるかよ」
さらっと言う少年だが、おそらくこの国には少年以外にこの魔法を扱える人間はいない。
「そう言えば、話は変わるがグローリー。まだお前から礼の言葉を貰ってないんだが？」
少年の言葉にグローリーは「うっ」とうめくように声を出す。
「……何故、貴様にこの私が礼など」
「この国の騎士様は自分の命だけでなく自分が守るべきだった民衆すら救ってくれた恩人に一つの礼すら言えないのか。やれやれ、国王陛下、この国はもう駄目かもしれないぜ？」
鷹揚に肩をすくめながら少年は王に目を向ける。
「ふむ。それは困るな。貴公の目は確かだ。そのような者に見限られては、本当にそうなるやもしれぬ。はてさて、どうすればよいものか」

王はわざとらしく嘆きの声を上げ、両腕で頭を抱えるようにする。その顔は半笑いだった。
それにグローリーはぷるぷると震え、堪え切れなくなったように言う。
「わかった！　言おう。だから、もう止めてくれ。陛下も、もうお止め下さい」
「何をだ？　俺にはよくわからんなぁ」
「うむ。余にもわからん。どういうことだ、グローリー」
両者が笑いで肩を揺らして言う。グローリーは少なくとも笑いではない感情で肩を震わせ、言う。
「……私たちの命を救ってくださって、ありがとうございます。貴方様の魔法がなければ、私たちは地区ごと消滅していたでしょう。此度のことは、全て貴方様のおかげでございます」
それに堪え切れないように少年はぶっと吹きだした。
「グローリーがそんなこと、言うなんて……これは堪えることなんてできるはずねぇだろ」
腹を抱えて苦しそうに少年は言う。グローリーは顔を真っ赤に染め上げ、震えていた。
何故グローリーが少年にこんなことをしているかと言うと、グローリーが生存していることは少年のおかげだからである。
魔王により襲撃されたグローリーたちがいた北地区だが、そこにいた人々は全員生存している。
それが何故かというと、やはり少年のおかげなのである。
少年はグローリーたち北地区に残る者たち全てに魔法付加をした。その魔法とは転移魔法であり、付加された者が危険になれば即座に特定された場所に転移させる魔法である。
少年は王に頼み、それだけの人間が入るだけの部屋を確保してもらい、そこを特定された場所とした。
実のところ、グローリーたちは自分たちに魔法付加されているとは知らず、最初に転移してきた時は何故自分たちが生きているのか

と疑問に思った。しかし、そんなことをする人間は少年しかおらず、出来る人間も少年しかいなかった。
少年は魔法のエキスパートとも言える人間たちに一切気付かれずに魔法付加を施していたのだ。それを知った時のグローリーは憤慨とともに深い感謝の念を抱いていた。だがやはり生意気だという感情を消せず、そもそも少年に感謝は個人的にしたくはなかった。
「でも、良かった。お前が、生きてくれて」
少年が柄にもなく、真摯な表情で言った。
グローリーは恥ずかしそうに顔を赤らめ、「……ふん。それに関しては、本当に――」
「死んだらもうからかえないもんな！」
「貴様ッ！　少し感動してしまったではないかッ！」
グローリーは剣を抜き、少年に向かって空間停止魔法を使う。しかし、少年はやはりいとも簡単にそれを防いだ。
「おいおい。魔法をそんな無駄使いすんなよ。俺ら人間は、魔族を殺すことくらいでしか魔力を増やせないんだからよ」
その言葉は正論であり、頭に血が上っていたグローリーも逆らえずに剣を鞘に収めた。
「……で、結局、用はなんだ？　ただその話をするために俺を呼んだってわけじゃあ、ないんだろう？」
「左様。貴公には、北地区へ行ってもらいたい」
「北地区？」王の言葉に少年は顔をしかめた。「あそこは魔王によって消滅されたんだろ？　今更、どうしようって言うんだ？」
「現在、北地区に魔力波が検知されている」
少年は驚きに目を瞠った。
「そうか。そういうことか。魔王の奴、やってくれるな。全てを消滅させることで、逆に新しく拠点を造るには好都合ってわけか。そして、北地区は、この国に隣接した地区。とられたくは、ないな」
「ああ。貴公のことだから遠視魔法か何かでもう見ておるだろうが、魔王はきれいさっぱりと言えるほどに北地区の全てを消滅させた。

そして、あの形は……」
「要塞、か。大きく半球状に抉り取られた大地は、おそらくその基盤のための部分。掘り進めることの短縮と俺たち人間が作り出していた全ての解体作業の短縮」
「そうだ。そしておそらくは、その要塞の形状は球。下半分は大地に隠れて見えぬ故、外からはドーム状に見えるだろうが、魔族どものことだ。何か細工をしているだろう」
「あいつらの魔法に関する技術は人間とは比べ物にならないからな。俺の予測では、おそらくその要塞は移動要塞だ。魔法によって浮遊し、移動する要塞」
「それが完成すれば、少し不味いな」
「そうだ。そして、魔法を扱う魔族どもならば、そんな要塞ですら、数日も経たずに建設できるだろう」
「……行ってくれるか？」
「無論だ。その代わり、グローリーとリストを連れていく。それ以外は、必要ない」
「許そう。では、頼んだぞ」
王の言葉に、少年は口の端を吊り上げた。
「任せろ。ついでに、これが俺に頼む最後になるようにしといてやるよ」

○　○　○

魔王が玉座に戻ると、そこにはシャムとピーピリープリーだけがいた。
「エレクトロ、チャイオニャ、コラプスは？」
「チャイオニャコラプスはー、帰りましたよぉー」
魔王が訊ねると、ピーピリープリーが可愛らしくも間延びした声を発した。
「では、エレクトロが行ったのか」

「そうでーす。私はぱぱっと要塞造ってる途中でぇーっす」
ピーピリープリーは空中に浮かんだ球状の映像に指を振る。その映像は先ほど魔王が消滅させた場所を映しており、そこには既に要塞のようなものの形が出来上がっていた。
「内部構造とか、機能についてはまだまだですけど、形だけならあと数分で終わりまーす」
その言葉に魔王は少々驚いた。そして、心配げに訊ねる。
「そうか。貴様にしては遅いではないか。どうした？」
「いやー、魔王様がそれを言いますか。魔王様の魔力の余波で私の魔力が届きにくくなっているんですよぅ。だから、遅くなるのも仕方ないっていうか」
「なら良い。シャム、エレクトロは何時、発った？」
シャムが魔王に頭を下げ、答える。
「魔王様が戻ってこられた七分前ほどです」
「ということは、ピーピリープリーが要塞を完成させると同じくらいに到着するか」
「いえ。エレクトロは魔力を節約すると言っていたので、数日はかかるでしょう」
「魔力の節約か。良い心掛けだ。今回の敵は、少々手強そうだからな」
魔王の言葉に、シャム、ピーピリープリーは驚愕に目を瞠った。
「魔王様が、言うほどなのですか？」
「ああ。妨害魔法を扱え、更にはあれ――ディープリースを倒したのだ。それだけでも、充分だとは思わないか？」
「いやいや。魔王様だったら、それくらいじゃあ、手強いなんて言わないでしょお。だって、魔族統一の時でも、その言葉を口に出したのは、シャムさんとか、フェイくらいじゃないですかー」
「そうだったか？　まあ、良いではないか。少なくとも、我には、此度の敵は手強いように感じられるのだ。それだけで、充分だ」
言って、魔王は笑った。

無邪気でいて不敵な、まるで最高の玩具を目の前にした児のような表情で。

エレクトロは走っていた。

その四肢を使い、地を蹴り、とてつもないスピードで走っていた。

その走りには黒き影のようなものが残像として残り、脚が地に着くごとにその地表が黒く染まった。

そこにエレクトロ以外の魔族は存在しなかった。エレクトロにも多くの部下はいるが、彼はその部下を使うことを安易に是としなかった。

その理由は様々だ。一つに部下の命の重要性を良くわかっているから。二つに自分が部下たちよりも圧倒的に強いことがわかっているから。

そして、現在においては、自分自身の目で見なければ納得できないからであり、そもそも魔力の消費を抑えながら走ってここまでのスピードを出せるのは、エレクトロの部下には存在しないからであった。

エレクトロが一人で走っているのにはそのような理由があり、では彼の部下はどうするのかというと、それは簡単である。

エレクトロが先に行くことで、転移魔法の転移先を指定できるのである。転移魔法では転移先を指定しなければ転移できない。故に、エレクトロは転移先を指定するために、一人、走っているのである。

魔王がそれより以前に現在エレクトロが目的地とする場所に転移したが、その指定先は最早使うことは叶わない。魔王の消滅魔法により、指定先は人間の拠点ごと消滅した。

一応、転移指定点は人間の拠点より数キロメートルは離れた場所にあったはずなのだが、如何せん、魔王の消滅魔法であれば、それほど先の地点であっても消滅するのは当然のこと。それを考えれば、魔王以外の者が向かうべきなのだが、此度のことは、理屈ではない。魔王直々に向かうことが、一種の弔いなのだ。

エレクトロ自身、人間に殺されたというディープリースとは面識があった。そして、彼はとても良い魔族であったと記憶していた。強い魔族だと言うことにも。

無論、ディープリースはエレクトロよりは弱い。それは当然のことだ。しかし、それでもエレクトロが認める程度には、ディープリースは強かった。

そのディープリースが、人間程度に殺された。それは容易には信じられないことであったし、現在でも信じ切れてはいない。

ただ、エレクトロは決意していた。

ディープリースを殺した人間と出会うことがあれば、自分が相手をし、殺すと。

そして、それをディープリースに捧げると。

×××

少年はリスト、グローリーを連れて、北地区近郊へと来ていた。

転移魔法を使っての移動だった。しかし、それはグローリーやリストによる転移魔法ではなかった。彼らの転移指定点は既に消滅してしまっていたのだ。

ということは消去法で少年が転移魔法を使ったと言うことになるが、少年が転移魔法を使うことができたのは、当然のこととして、転移指定点が残っていたからである。

少年は保険として、北地区から遠く離れた地点にも転移指定点を刻んでいた。無論、グローリーも数キロメートル先ならば刻んでいたが、少年の場合、もっと先まで刻んでいた。

それをグローリーとリストは不思議に思ったが、少年曰く、「俺はこんなことが起こることを予想していたんだよ。だから、グローリーたちにも転移魔法を付加したんだしな。まあ、今回のことは、少し予想外だったがな。念のため、ここにも転移指定点を刻んでおいたが、良かったぜ」だそうだ。

少年は簡単に言ったが、無論、簡単なことではない。グローリーが刻んだ数キロメートル先が、その『念のため』なのだ。だが、少年は数キロメートル先に転移指定点を刻むことなど、念のためではなかった。全ては予想の範囲内のことだったのだ。もしも、魔王の襲撃がなかったとしても、それはそれで予想の範囲内のことだったのだろう。グローリーとリストはこの少年の底の深さに一種の恐怖さえ覚えていた。これほどまでの若さで、これほどまで最悪の事態を予想する少年。それは、一種の恐怖を覚えるに充分値するものであった。その、今までの、生涯に対して。

「待て」

少年がグローリー、リストを制した。手をグローリーとリストの前に突き出したまま、少年は遠いものを見るように目を細めている。

「どうしたのだ？」

グローリーが訊ねると、少年は険しい顔をして答えた。

「……これ以上近づくと、気付かれる。結界魔法、それも遠隔の。確かに、結界魔法ならば場所さえわかっていれば転移魔法のような指定点がなくとも遠隔で発動することはできるが、これほどまで巨大な結界魔法とは、な」

「どうするのですか？」

「様子見、と言いたいところだが、あの結界魔法は厄介だ。結界により異世界へと変幻した世界と術者が繋がっている。いや、正確には、結界により世界を切り取っているのか。確かに、それならば実際のスケールよりも小さくできる。あれほどまでに大きな要塞を造るため、まず空間のスケールを小さくしたのか。そうすれば、造るだけならその小さいスケールで作業することができる。作業時間の短縮と簡易化。おいおい、しかもこの術式、魔王のそれとは違うじゃねえか。魔王以外にも、こんなもんができる奴が魔族にはいんのかよ。道のりは長そうだなか、おい」

少年はどこか興奮した様子で声を上げる。

「よし。決定だ。グローリー、リスト。今すぐ突撃する。だが、お

前らは絶対に戦闘に参加するな。隠蔽魔法をかけておくから、結界の術者にはばれないだろう。しかし、俺の予想では、もう一匹、魔族が来るはずだ。要塞が出来た後に、その主となる者が、な」
　すると、グローリーとリストは慌てた調子で尋ねる。
「では、私たちはどうすれば？」
「見ておけ。俺の戦いを。そして、学べ。もう俺という生意気なガキに頼らなくても済むようにな」

×　○　×

「ん？」
　ピーピリープリーがそんな声を上げた。
「どうしたのだ？」
「いやあ、なんか、侵入者が来たというかー」
　それに魔王は眉をしかめ、しかしすぐにその表情を嬉々としたものに変えた。
「それは良い。……エレクトロ、聞こえておるか？」
《はい。なんでしょうか？》
　エレクトロの声が聞こえた。魔王が通信魔法を使った結果だ。
「全力で向かえ。おそらく、ディープリースの仇はもうそこにいる」
《……承知ッ！》
　エレクトロの興奮した声を聞き、魔王はその表情を大きく歪ませた。
「さて。我も向かう準備をしておくか」
　だが、その望みは叶わない。
「ちょっ……！　魔王様ッ！　結界が、侵食されています！」
「なんだと？　それは真か？」
「はい。というか、これ、もしかしたら私より……」
　信じられないとでも言うようにピーピリープリーは狼狽する。それを見て、魔王は大きく舌打ちをした。

「人間。どれほどまで、我らに逆らえば気が済むのだ」

少年は結界の中に入り、とある魔法を行使していた。

侵食魔法。相手の魔法を侵食し、自らの力とする魔法だった。

無論、何の条件もなくそんな力を行使できるはずもなく、この魔法にはある条件があった。単純であり、それ故に、最悪とも言える条件が。

その条件とは、つまりは『相手の魔法を完全に理解し、それを覆すほどの技術があること』であった。

知識と技術。その両方が相手以上でなければ、この魔法は行使されないのだ。

そんな困難な条件を、少年は乗り越えた。

実のところ、少年にとって、侵食魔法の条件とは、好都合なものだった。

それは、魔力量が魔族より少ない人間、回復することがなく、魔族から奪うことでしか魔力を増やすことができない人間だからこその思いだった。

もしも魔力量で条件が変わるのであれば、これほど少年にとって不都合なことはなかった。少年の魔力量は他の人間よりは大きいが、こんな結界魔法を扱えるような魔族より大きいかと問われれば、否と答えるより他はない。

それ故に、少年にとっては、このような魔法こそが真骨頂だったのだ。

そもそも、人間は魔法を『理解』することによって初めて行使できるのだ。つまり、最初から二つの条件の内一つはクリアしているようなもの。

もう一つについては、賭けのようなものだった。少年からしても、これほどまで綿密に編まれた結界を見るのは初めてだった。おそらく、単純な技術では少年はこの結界を張った魔族よりも劣っているだろう。

しかし、単純な技術でなくとも、良いのだ。
自らの知識を活用し、その魔法がどうやって編まれたかをその魔力を解析することによって知り、それにより、この結界にだけ通用する魔法を創りだす。
少年がやったことは、簡単に言えばそんなことだった。
単純な技術ではなく、それだけに集中することによって、その技術を覆すことのみに全力を尽くし、結果、侵食魔法は成功した。
「七百メートル先、要塞建設地点だ。そろそろ遠視魔法だけにしておけ。さすがに、視認されれば、ばれる。隠蔽魔法は結界に対してしか行使していないからな」
《了解》
少年の耳にそんな声が響いた。通信魔法を使っていた。既にグローリーとリストは少年の近くにはいない。遠くから見ているだけだ。
少年は通信魔法を切断した。
そして、脚に魔力を溜め、地を蹴る瞬間、魔法を発動させる。
魔力が脚から回転するように噴出し、少年の移動を加速させる。
数秒もかからず、少年は要塞が建設されている場所まで来た。
魔王の消滅魔法により、クレーターが出来ている場所に。
人間の痕跡が消えた場所に。

「誰か来た？　いや、見えない。妨害魔法か！　だけど、ここまでの妨害魔法を人間如きが？　興味深いと同時に嫌悪感バリバリね！
私の結界を侵食しているってことは、もしかして、要塞も……！
ああ！　エレクトロ！　頼んだわよ！」
ピーピリープリーが乱暴に頭を掻き、投げやりに叫んだ。
《承知》
エレクトロはそれだけを通信し、通信魔法は切断された。
魔王は玉座で目を瞑り、何かを思案していた。
それは突然だった。

少年はクレーターの中心部、すなわち要塞の中心部へと跳んだ。
そして、要塞に触れ、その魔法を解析していた。
すると、少年はいきなり剣を抜き、構えた。
それを黒き衝撃が襲った。
要塞の壁をなかったかのように突破したその衝撃は、だが少年に防がれた。少年は顔をしかめ、衝撃が来た方向へ向かって剣を振った。剣から白い衝撃が放たれた。
少年が要塞の外を見ると、そこには犬のような魔族がいた。二対の紅き眼。四本の脚にも二対ずつ紅き眼があり、黒き体毛の中、尾の先だけが灰色だった。
そして、その尾の先からどろっとした何かが絶えず空気中に放出され、霧散して言っている。
「ほう。今のを防ぐとはな」
魔族は言った。感心したような声であり、その声はつまり、少年の攻撃も防いだことを意味していた。
「当然だ。殺気を出しすぎなんだよ、知能あんのか？」
少年は挑発したように言ったが、魔族はそれに苛立ちを全く見せず、言う。
「私はエレクトロ。魔王様が配下、第七将軍エレクトロなり。ディープリースが仇を討つために参上した。貴公をそれだと見受けするが、どうだ？」
「ディープリース、か。ああ、覚えているよ。お前のようにわざわざ自分の名を言ってから戦った馬鹿な魔族だ。無論、俺が殺した」
「そうか。ならば良い。……貴様を此処で殺し、ディープリースへの手向けとしよう！」
途端、魔族――エレクトロの背から黒き魔力が放出された。それは抑えていたものを解放するようであり、事実、そうであった。
少年は直感した。これこそが、こいつの戦闘態勢だと。故に、警戒し、剣を構えた。
直後、少年の背後からエレクトロが迫った。

「なんっ……！」少年は驚愕し、振り返り、咄嗟に剣を振った。それはエレクトロの爪に当たり、両者共に弾かれた。
そしてエレクトロも驚愕していた。まさか反応されるとは思わなかったし、まして自分の爪が防がれるとは思ってもみなかった。人間如きの剣で、自分の爪が弾かれるなど、思ってもみなかったのだ。
「流石は、ディープリースを倒した人間、とでも言っておこうか」
「お褒めにあずかり光栄だ。だが、犬っころの攻撃を防いだくらいで、褒めるなよ」
少年は挑発じみた笑みを浮かべ、だがその目は笑っていなかった。
今、少年は必死だった。必死に思考していた。必死に解析していた。
エレクトロがどうやって一瞬で自分の背後に移動したのかを。
転移魔法ではなかった。転移指定点などを刻む時間などなかった。だが、転移魔法でないとしたら、なんだ。なんなんだ。
必死に思考しながら、しかし、エレクトロにそんなことは関係ない。
エレクトロは口を開け――咆哮。文字に変換することなどできない、轟音としか呼べないような咆哮と共に、その口からは黒い砲弾が発射されていた。
びりびりと少年の肌を轟音が震えさせ、黒い砲弾が少年へと向かう。少年は剣を構え、その砲弾を斬ろうとして、止める。少年は前傾姿勢で砲弾の方向へと跳び出し、魔力の噴出により、紙一重のところで砲弾を避ける。そのまま少年はエレクトロへ向かい、手に持つ剣を振った。
エレクトロはそれを避けようともせず、剣がエレクトロを通りすぎた。
「やっぱりかッ！」少年は舌打ちをして、真上に跳ぶ。直前まで少年がいた場所に青年の目の前にいるはずのエレクトロが青年の背後から黒い衝撃を放ち、地が大きく抉られる。
「その尾。そこから出てるのは何か。ずっと気になってたんだ」

少年は話しながら、魔力を放出し、地に降り立つ。
「それが、やっとわかった。良く良く考えれば、そうだな。簡単なことだった」
「……人間如きが、私の魔法を見破ったと？」
「そう言ってるんだよ、犬畜生。そして、もうそれは征服した」
その言葉と共に、少年の身体を黒い影が覆った。エレクトロはそれを見た瞬間に口を開け、咆哮。黒い砲弾が放たれ、少年を襲う。だが、少年は避けない。さすれば、当然少年に黒の砲弾は激突する。
土煙が舞った。
それを見たエレクトロは尾を思い切り振った。「うおっ、と！」尾の先からそんな声が聞こえた。
「よもや、本当に見破られているとは思わなかったぞ、人間」
「はっ！　嘘こけ。思いっきりベストタイミングだっただろうが」
「もしも貴様が私の魔法を見破っていた時のことを考えたまで」
「そうかよ。さて、お前の魔法はもう見破ったわけだが、どうする？　まだ続けるか？」
「無論」
エレクトロが前足を振り上げ、地に叩きつける。それにより地が揺れるが、直前に跳んでいた少年には無効。少年は魔法を発動。黒い影が少年の身体を覆う。エレクトロの背から小さな黒い犬型の影が出現し、少年に向かう。少年は少し驚きながらも剣の一振りでそれを消滅。その隙にエレクトロは魔法で移動。先ほどまでいたエレクトロの姿が影のように消える。それを見た少年は魔力の放出により方向転換、右へ。すると、少年の肩にエレクトロの牙がかすり、だがそれだけで少年の肩は大きく抉れる。
「畜生の分際で、先読みなんかしやがって」
「人間如きができることを、魔族ができないはずがないだろう」
「そうか。なら、それを覆してやろう」
少年が言うと、肩が抉れた少年の姿が影のように消えた。
「何だと！」

エレクトロが驚き、だが狼狽せず、ただその身に黒き影を纏わせる。
「チェックメイトだ」
少年の姿がエレクトロの頭上に出現し、少年が剣を振ると、エレクトロの身体は真っ二つになる。だが、それもすぐに影となり、消える。
「諦めろ。もう、俺の勝ちだ。……魔族如きにできることが、この俺に出来ないとでも思ったのか？」
瞬間、少年の背後で爆発が起こった。「罠魔法、だと？　何時の間にッ！」そこからエレクトロの声が聞こえた。すると、少年は呆れたように溜息を吐き、
「だから、言ってんだろ。この戦いは、最早、畜生如きには解り得ない領域へと到達した。お前の行動は全て見破った。もうお前は俺に触れることすらできない。死ね、畜生。俺のために。俺の理想を実現するために」
少年の右斜め前で爆発。エレクトロの呻き声。少年の左で爆発。エレクトロの呻き声。少年の真上で爆発。エレクトロの呻き声。前方で爆発。呻き声。爆発。呻き声。爆発。爆発。爆発。爆発爆発爆発爆発爆発爆発爆発爆発――
そして、数分後、少年の前には傷だらけのエレクトロが横たわっていた。
多くの傷。様々な傷。肉が露出し、その色も黒だった。血のようなものは流れず、ただ肉が焼けたような香ばしい臭いが鼻についた。
「お前は強かった。そして、知能もまあまあ高い。だが、俺には程遠い」
「……人間、如きが。私を倒すとは、な」
「ああ、俺は人間だ。おそらく、最強の。だから、光栄に思え」
「思うはずが、ないだろう。だが、貴様の力は、認めよう。喜べ。私に褒められるなど、我が部下ならば歓喜に震え、涙を流すぞ」
「誰が喜ぶか。バカが。まあ、俺もお前の力は認めてやっても良い。

第七でこれなら、俺は魔王にはまだ敵わないな」
「当然だ。魔王様に、貴様如きが敵うはずはない。いや、それ以前に、私以外の将軍にも勝てるかどうか。お前は私だったからこそ勝てたということを忘れるな。全ての魔族が私のようだと思うと、痛い目を見ることになる」
「ご忠告ありがとう。そんなことはわかってるから気に病むな。もし全ての魔族がお前のように誇り高いのならば、俺は魔族を滅ぼすことなど望まない。魔族の仲間になって、人間を滅ぼしただろうよ」
「そうだったら、と思ってしまうな。貴様ほどの力を持つ者が加われば、魔族に多大な益をもたらすことだろう。今でも遅くはない。魔王様の配下にはならぬか？」
「ならねぇよ。俺は魔族を滅ぼすと決めた」
「何故だ？　人間のためか。世界のためか。貴様は、どのような大義をもって戦う？」
「違うな。俺の道に大義など無い。ただ自らのために」
「……貴様は、自分のために、魔族を滅ぼすと？」
「ああ。俺の理想は魔族のいない世界だ。人間が統治する世界だ。そんな世界で生きるために、俺は戦う。ただ俺のために、俺はこの世界を変える。魔族を滅ぼし、世界を治め、ただ俺が幸福を得るために。不幸を許さず、幸福に満ちた世界を創るため」
「叶わぬ夢だ。そんな途方もない夢を、何故想う？」
「それが俺の理想だからだ」
　その言葉に、エレクトロは笑う。馬鹿にするように。羨望するように。
「良いだろう。ならば、我が屍を踏んで行け。さすれば、私は貴様の脚を掴み、地の獄へ引きずってやろう」
「それは結構。……じゃあ、もう、終わりだ」
　言い、少年が剣を振り上げる。それにエレクトロはふっと笑い、
「そうか。では、地の獄で貴様を待つ。魔王様に破れ、絶望するのを楽しみにしておく」

「言ってろ、犬畜生が」
少年は剣を振り下ろした。

×　○　×

「……魔王様。出撃許可を」
ピーピリープリーが抑えに抑えた声を発した。
「ならぬ」
「何故、ですか？」
「今向かうのは危険だ。エレクトロを倒したと言うことは、エレクトロの魔力を得たと言うことだ。エレクトロを倒したほどの者が、そのままエレクトロの魔力を得たのだぞ？　貴様は、それに勝てると申すのか」
「それはっ……！」
ピーピリープリーが悲痛な声を発し、それに魔王は平坦な声で、
「必勝ではないのならば不戦。故に、貴様の出撃を許可することは出来ぬ。解るな？」
「解り、ます。ですが、今だからこそ、とは考えられないでしょうか？」
「ああ。だが、エレクトロの死を無駄にすることは許さん。あれの死によって、少しこれからの方針が決まった――シャム」
魔王が呼ぶと、シャムが何処からか出現する。
「何でしょうか？」
「招集だ。将軍を呼べ」
「何人でございますか」
「全員だ。エレクトロが死んだ今、だからこそ、解ったことがある。故に、全員招集しろ」
「御意」
シャムが消えた。

×××

少年に呼ばれたグローリーとリストが見たものは、今までに見たことがないほどに強大な魔族だった。

無論、それにも驚いたが、それよりも驚いたのが少年の言葉だった。

「グローリー、リスト。お前ら、こいつの魔力を奪え」

その言葉に、グローリーとリストは唖然とした。何を言っているのだろうと本気で思った。

その思いは当然だ。人間はその魔力を魔族から奪うことによって増やしており、その増える量はその魔族の最大魔力量である。そのため、魔族からすれば、人間は魔力を倒した魔族の最大魔力量をそのまま増やすことができる、なんてふざけているとしか言えないような存在であるが、それ故の欠点もある。

魔力が自然回復しないのである。

人間は魔力を使うと、その分魔力が消費され、それが自然に元に戻ることはない。魔族から奪うことでしか魔力を増やすことはできず、そのため、魔法を扱うには魔族を倒し、その魔力を奪わなければならない。

当然のことながら、奪う魔力量よりも多くの魔力を使って戦闘をしたとすれば、その総和はマイナスとなる。魔力を使ったのならば、その分を倒した魔族から奪わなければ損なのである。

しかし――故に、今、少年が言っていることはおかしい。

少年は此度の戦闘で多大な魔力を消費したはずである。遠視していたグローリーとリストから言わせると、見たこともないほどの魔力消費である。それほどの魔力消費をして、少年は彼らに魔族の魔力を奪え、と言うのである。なんともおかしい。

「何故だ？　貴様は魔力を消費しているだろう。貴様が奪えば良いではないか。私たちは、何もしていないのだから」

「そうです。私たちは何もしていません。だから、この魔族の魔力

を奪う権利は、貴方に存在するはずです」
　そんな彼らの言葉に、少年は呆れるように溜息を吐き、
「お前ら、馬鹿だろ。それじゃあ、なんでお前らをわざわざ連れてきたのかわからねぇだろ。半分以上が、このためだっての」
「ですが権利は貴方に……」
「うっぜぇなあ。なら、権利が俺にあるのなら、それをどうしようと俺の勝手だろ。だから、お前らが奪え。それで良いだろ」
「屁理屈だ」
「屁でも理屈なら良いだろ。そもそも、魔法を使うのなら、理屈に囚われてんじゃねぇよ。感覚と理屈を組み合わせて考えろ。理屈がどうでも良いわけじゃあないが、それよりも重視するものも存在する。正しき天秤にかけよ。それにのみ正しき道は示される、ってな」
　少年の言葉には納得できなかったが、間違ったことを言っているわけでもない。それに、魔力を貰えると言うのは本来であればありがたいことである。しかし、少年にはこれまでにも色々と世話になっている手前、この上少年が倒した魔族の魔力まで貰うと言うのは、気が引ける。
「……ったく。固い奴らだな。勘違いしているんだったら、言っておく。これは別にお前らのためを思ってとか、そんなもんじゃねぇ。俺は俺のためだけに行動している。お前らのためだとか、そういう善の心など俺には存在しない。これは、俺のためのことなんだ。お前らが魔力を得る。そうすることが、俺にとっての得なんだよ」
　グローリーとリストがわけがわからないと言うような顔をする。
少年は再度溜息を吐く。
「お前らが魔力を得ることにより、この国の戦力を増強させる。お前らは魔法のセンスは良いし、それも俺が少しは開花させてやった。お前らには、知識と技術の両方が充分に存在する。そこで、足りないのは魔力のみだ。故に、俺はお前らに魔力を与える。さすれば、お前らは俺が認めるレベルに達する。つまり、俺が手を貸さずとも、もう良くなる。お前らが持つ知識、技術をもって、部下を鍛えろ。

そして、強くなれ。お前らだけでも、魔族に侵攻することが可能になるほどに。……わかったか？　俺は、俺のためにお前らに魔力を与えるんだ。もう、お前らに手を貸すのは面倒くさいから、それが嫌だから、お前らに魔力を与えるんだ。わかったら、さっさとその魔族から魔力を奪え」

少年はそんなことを言った。

その言葉が嘘のようには思えなかったし、事実、少年は本心からそんな言葉を放っていた。無論、ただ言葉だけ聞いたならば、自分の本心を隠すのがとてつもなく下手な言葉であると言う印象、噛み砕いて言うのであれば、本当は相手のためなのだけれどそれを正直に言うのは恥ずかしいから嘘を吐いたけど、その嘘が下手であると言う印象を受けるであろう。しかし、少年の言葉は紛れもなく本心であり、つまりは本心からグローリーやリストに魔力を与え、いわゆる自立をさせると言うことを自分のためにすると言っているのだ。グローリーやリストでさえ、少年が本心で言っているのかどうかを疑うくらいに紛らわしいが、少年がたった今言ったことは紛れもなく本心なのである。

「……では、頂きます」

リストが遠慮がちに会釈をし、エレクトロの死骸へと歩み寄り、その手をかざした。

「未だに納得はしかねるが、貴様に従い、私も頂こう」

グローリーは無理に尊厳な口調をしながら、リストと同じようにして、手をかざした。

すると、エレクトロの死骸から膨大とも言える魔力が彼らの体内に流れ込んだ。

「なぁッ！」「むぅッ！」思わずそんな声を上げてしまうほどの膨大な魔力。彼らの体表に血管が浮かび上がり、その中を魔力が這いずりまわる。彼らの体内で魔力が暴れ、肉体が拒絶反応を示す。膨大すぎる魔力が突然体内に流れ込んだことによる拒絶反応であった。全ての動脈がはっきりそれとわかるほどに浮かび上がり、目が血走

る。耳鳴りがする。呼吸ができず、肺が締め付けられるような感覚に襲われる。喉も胃も、全ての器官が締め付けられるような感覚。否、感覚だけではなく、実際に締め付けられているのかもしれない。胃液で口内がいっぱいになり、とても苦い。眼球が今にも飛び出してしまいそう。痛み。苦しみ。不快感。様々な感覚が体中を巡り、暴れまわる。

――どのくらい時間が経ったのか、やがて、それは終わった。

ぜぇぜぇ息を吐きながら、彼らは地に倒れ伏していた。その近くには吐瀉物がぶちまけられており、つんと鼻を刺す臭いがする。彼らの口の周りにはそれと同じものが付着しており、今はそれと土が混ざっている。汗で身体中がびしょびしょに濡れ、顔面は蒼白。ぷるぷると身体が痙攣している以外には、何の動きもない。

その近くには、既にエレクトロの死骸はなかった。魔力が奪われるにつれて、その肉体は影のように消えていき、ついには完全に消えてしまったのだ。

「結構耐えたな。最低でも失禁するとは思ってたんだが、まだ意識があるじゃねぇか。これは予想以上だ。お前ら、やっぱり見込みがあるよ。王の配下から離れ、俺と来ないか？」

笑いながら言う少年に対して、彼らは揃って力なく首を横に振った。

○　○　○

魔王が言った。

「エレクトロが死んだ」

それは集まった魔族たちに大きな衝撃を与えた。

「これがどう言うことか、解るな？」

魔族たちは微動だにしなかった。解らなかったからではない。応える必要すらなかったからだ。

「そうだ。――故に、これより方針を変える。シャム」

「此処に」
魔王が言うと、シャムがその横に現れた。
「では、これより始めようか。人間どもを駆逐するための、本格的な会議を、な」

――この日から、魔族たちの動きは大きく変わった。
まず、人間の街への侵略行為がなくなった。
これにより、人間たちは大いに喜んだ。
次に、人間が魔族に襲われる事例がなくなった。
無論、これについても人間は大いに喜んだ。
しかし、それはこれより始まることの準備にすぎなかった。
それに気付いている人間は、一握りしかいなかった。
そして、それを好機だと見る人間は、ただの一人しかいなかった。
とある少年だけしか。

第二節　―１―

ルージェの腹が裂かれ、そこからハラワタが引きずりだされた。すると、魔族はルージェの身体をぽいとそこらに放った。

レナリーはそれを恐怖に震えながら見ていた。

彼女たちの住む村を、突然、魔族が襲った。

ここ数年はなかった魔族の襲撃に、しかし村の人間たちは対応できた。村の人間たちは、数年なかった魔族の襲撃に対しても油断していなかったのだ。村の自警団は皆、訓練を少しも怠らずにこの数年を過ごしてきた。

それが無駄だったことが今日わかった。

「ひっ、ひぃっ！　こ、来ないでぇ……」

レナリーは腰を地に落とし、そばかすが特徴の顔を涙や鼻水でくしゃくしゃにしながら声を上げた。立とうとしても立つことができない。下半身に全く力が入らず、やっとのことで腕が動かせるくらいだ。腕が動かせても何の意味もないが。

魔族はルージェの身体を放った後、レナリーの方を見た。

レナリーは悲鳴を上げられなかった。その喉を魔族の腕に掴まれたからだ。

その魔族は人間のような身体を持っていたが、首はなく、脚が四本、腕は十六本あった。体長は五メートルはあり、その腕の一本一本がレナリーの身体より大きかった。その肌の色は黒い。眼球は人間と同じようなものが、十六本の腕にびっしりと埋まっている。

その腕の一本に、レナリーの喉は掴まれたのだ。いや、つままれたと言った方が適切かもしれない。それほどまでに魔族の腕は大きく、逞しかった。

――私、ここで死ぬの……？

レナリーはそんなことを思っていた。まだまだしたいことはたくさんあった。やり残したことはたくさんあった。

だが、そこでレナリーは違うことに思い至った。
――みんなが死んじゃったら、もう、意味なんて、ない。
皆、死んだのだ。レナリーを除いた全ての人間が死んだのだ。ならば、もう生きる意味なんてないのではないか。そう、ないのだ。もう、生きる意味などは存在しない。だから、私はこれから、皆のいるところに行くのだ。きっと。きっとそうなんだ。死後の世界へ。楽園へ。私たちは行くのだ。なら、もう、死んだって、良い。死ぬ方が、良いのだ。
レナリーは笑った。涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔を、無理矢理笑みの形に変えた。
それはぎこちない笑みだった。あきらめたような笑みだっだ。
魔族の腕に力が込められ、レナリーの喉は圧迫され、呼吸ができなくなる。
苦しみが脳を支配した。
どんどん腕の力は増し、どんどん痛みが増す。
呼吸ができない。首が痛い。
それだけのことで、レナリーは、無意識の内に、思った。
先ほどまでに思っていたことなど、全て吹き飛んで。
ただ一つ、強く、強くこう思った。
――死にたくない。
そう思ったが故に、レナリーは精一杯抵抗した。かろうじて動く腕で何度も魔族の腕を叩いた。脚をばたばたと動かし、魔族の腕を蹴った。無論、それは魔族には何の傷も与えない。何のダメージも与えない。
魔族は無駄なことをするレナリーを見て、笑った。口などは存在しないが、その腕にある眼球で、確かに笑った。
するとその眼球が抉られた。
「クズが。人間様に手を出してんじゃねぇよ」
次にレナリーの喉を掴む腕が斬られ、すとんとレナリーは地に落ちた。

レナリーはごほごほと大きく咳をした。流れていた涙が目に溜まり、少しの間、何も見えなくなった。
そして、レナリーが目を拭い、顔を上げた時、そこにはばらばらになった魔族と一人の青年がいた。
精悍の一言を身体で現したような容姿。髪は夜の闇に似た黒。長く重そうな剣を片手で持ち、しかし防具の類は何も身につけてはいないようだった。
「……え？」
レナリーは思わずそんな声を上げていた。今の状況を受け止めることができなかったのだ。無論、受け止めることができたとしても、そんな声を上げていただろうが。
すると、青年はレナリーの方に目を向け、嬉しそうに「良かった」と笑った。
だがすぐにその顔を曇らせた。その視線の先には、大勢の人間の死骸が転がっていた。
「すまんな」
それにレナリーはふっと顔を上げた。
「俺が、もう少し早く着いていれば、こんなことにはならなかったのに」
そう言った青年の顔は、とても悲しげで、申し訳なさそうであった。
――この時、青年は十七歳となっていた。

「飲め」
そう言って青年はひょいと何かが入った瓶を放り投げてきた。レナリーは両手でそれを掴み取り、「……これは？」と首を傾げる。
「薬だ。味は保証しかねるが、魔法で作った薬だから、効果は期待して良い」
レナリーは瓶の中に入っている液体をじっと見つめた。緑色で、どろっとしている。瓶の口に鼻を近づけると、なんだか嫌な臭いが

した。
「そんな警戒すんな。大丈夫だ。なんなら、俺が飲んでみせようか？」
そう言うと、青年はレナリーが答える前にレナリーの手から瓶を奪い取り、口を付け、瓶を傾けた。ごくっと喉が鳴り、青年は瓶から口を離し、変な顔をした。「……いや、やっぱり不味いな」
そう言われると飲む気が失せてしまうのが人間である。そしてレナリーはれっきとした人間であり、無論、そんなことを言われると飲む気が失せてしまったのである。
故に、青年から差し出された瓶を嫌そうに、だがやんわりと拒絶しようとしたが、青年は顔をむっとしかめ、無理にレナリーの方へ瓶を押し付けた。最早こうなると、自分だけ不味いものを飲んだことが気に食わないからレナリーにも同じ気持ちを味あわせてやろうとでも思っているようである。そして事実、青年は半分くらいそう思っていたのである。
ぐいぐい押しつけられても拒絶するレナリーに業を煮やしたのか、青年はレナリーの頭を掴み、思い切りその瓶の口とレナリーの口をくっつけた。レナリーは口を一文字に閉ざしていたが、青年の力に敵うはずもなく瓶の口がレナリーの口内へと入れられた。どろっとした液体がレナリーの口内に入り込み、それは喉を通り、胃に落ちる。
すると、青年は瓶をレナリーの口から抜き出し、満足そうに笑った。レナリーはその液体の余りの不味さにむせながら、この人、嫌な人だ、と思った。
「どうだ？　治っただろ」
青年に言われ、まず何のことだろうと思ったレナリーであったが、その問いの答えにはすぐに思い至った。喉の痛みが消えているのだ。さきほどまでの傷が癒えていたのだ。
レナリーはまず驚いた。まさかあんな薬にそれほどまでの効果があるとは思わなかったのだ。青年の言うことが嘘ではないことはわ

かっていたつもりだが、ここまでの効果とは思わなかった。魔法によって作られた薬でも、ここまでの即効性を持つ薬など聞いたことがなかった。レナリーの住む村は確かに都から離れてはいるが、それほどまでに情報の伝達が遅いとは考え難い。魔法学の発展により、様々なものが開発され、情報の伝達のスピードも以前とは段違いになったのだ。

しかし、青年の持っていた薬ほど効果のあるものは聞いたことがなかった。そんな薬があるのであれば大ニュースになるはずであるが、そんなことはたったの一度も聞いたことがない。

「その薬は俺が以前いた国で開発された薬でな。俺もそれに協力したんだよ。感触と味はまだまだ改良中らしいが、それは俺の範囲外だ。だから、その時点でのサンプルをもらったってわけだ。一応は、現代魔法学の最先端技術の結晶だ。そんなもんを飲むことができたんだ。俺に感謝しろ」

青年は傲岸不遜な調子で胸を張った。いやはや謎は解けたが、こんな人がそんなにすごい人だとは微塵も思えない。しかしそれ以外にこの謎の答えはなく、つまりはこの青年の言葉を信じる他ないのである。

「なんで、そんな貴重なものを、私に？」

青年の言葉を聞いてレナリーがまず思ったのはそれだった。そんな貴重なものを何故自分に与えたのだろうか。自分はそんなに重傷でもなく、ただ喉が痛かっただけなのに。

その質問に青年が簡単に答えた。

「当然、俺がそうしたかったからだ」

無論、レナリーにとっては当然ではなかった。

「したかったから、って。どういうこと、なの？」

レナリーには青年の言ったことが咄嗟に理解できなかった。いや、咄嗟でなくとも理解はできないだろう。レナリーにとって、そんな貴重なものを『したかったから』などという理由で他人に、しかも今日初めて会ったような他人に与えるなど、考えられないことであ

った。
　しかし青年にとってはそうではなかった。
「そのまんまの意味だ」青年は何故わざわざそんなことを訊ねるのか心底不思議なように言った。「俺がしたかったから。お前が傷に痛むのが我慢ならなかったから。俺が治してやりたかったから。感謝してもらいたかったから。あわよくば俺に好意を抱いてほしかったから。礼として何かもらいたかったから。偽善でも何でもいいから良いことをやったという満足感を得たかったから。あと、この不味さがどれほどのものか他人にも味わってやらせたかったから、とか。まあ見返りが欲しかったから、ってわけだな」
　青年はさらっとそんなことを言った。それは青年の本音なのかもしれないが、もしそうなのだとしたらどれほど馬鹿正直なのだと思う。恥ずかしい言葉も、自分の欲望に塗れた言葉も、何でも正直に言った。成程それは確かに『したかったから』という理由ではある。
　レナリーは困惑していた。これこそ当然である。感謝してもらいたい、礼として何かもらいたいとはっきりと言われるのは初めてであったのだ。いや、それは良いとしても好意を抱いてほしかった、など……。レナリーは顔を髪の色と同じように赤くした。そんなことを言われるのは初めてだったのだ。
誰でも他人に優しくする時はそういう『見返り』を心の奥底で求めるものであるかもしれないが、それを面と向かってはっきりと言われれば、困惑してしまうのは当然である。
「何、顔を赤くしてんだよ。俺に惚れたか？　それはとてもとても嬉しいが、やめといた方が良いぜ」
　青年は肩をすくめながら笑った。それを見て、レナリーは顔をむっとしかめた。
「そんなわけないじゃない。誰が、あなたのことなんかっ」
　青年の言葉は冗談のように聞こえたし、実際、冗談なのだろう。そんなことはわかりきっていたが、それでも自分の言葉を抑えることはできなかった。その理由はよくわからないが、感情に理屈など

ないので気にしていても仕方がない。
「ん。そうか。なら、絶対にそうしておけ。俺はお前に好意を持ってもらいたいが、同時に好意を持ってもらっては困るからな」
「なっ……。わけわかんない。どういうこと？」
「俺の征く道は茨の道だからだ。俺は茨などで傷つくことはないが、俺以外の人間は簡単に傷ついてしまう。簡単に言えば、危険なんだよ。俺と共に、征くことは」
そう言った青年の顔は精悍そのものであった。その目に宿る意志は途方もなく強大であることが容易に感じ取れたし、事実、青年の意志は途方もなく強大だった。
何故か。それは簡単だ。
「あなたの、道って？」
「魔王を倒し、魔族を滅ぼし、人間の世界を治める。そんな道だ」
一言で言うならば、覇道。
それこそが、青年の意志だったからだ。
「はぁ？　そんなこと、できるわけ……」
言いながら、レナリーは思い出していた。先ほどのことを。青年が一瞬でレナリーの村を襲った魔族を殺したことを。
「できる、わけ……」
それに、この青年は、あんな薬を持っていたじゃないか。最先端技術の結晶。それを手にするほどの実力。それが、この青年には、確かにある。
しかし、それでも魔王を倒すことなど、途方もない話であった。途方もない夢。叶うはずのない夢。
「だけど」
そう。だけど、信じたい。
叶うはずのない夢。そうだったとしても、信じたい。彼のことを。彼の言葉を。
何故、そんなにも信じたいと思うのだろう。レナリーは疑問を覚えたが、その答えは、すぐに導き出された。

魔族を滅ぼす。
それは、今のレナリーにとっても悲願そのものであったのだ。
自分ではできるはずもなく、だが、どうしてもあきらめられない。そんな夢。
それを、もしかしたら実現できるかもしれない人が。実現しようとしてくれている人が、今ここに、いるのだ。はっきりとした意志を持って、それを実現しようとしている人が。
それを、否定など、できるだろうか。
私の願いを、叶えてくれるかもしれない人を、否定することなどできるだろうか。
否定してしまっては何もできない。全ては信ずることから始まる。
私が信じなくて、誰が信じる。同じ願いを持つ者ならば、信じなければいけないだろう。それを叶えたいのならば、それを不可能と断じてはいけないのだ。自分の願いを不可能と断じてしまってはいけない。それでは、私は、何のために生きているのだ。自分の願いを否定して、生きる意味なんてあるのか。願いこそが生きる意味なのではないのか。
「……だけど、信じる。あなたが、魔族を滅ぼすって。滅ぼしてくれるって」
もちろん、自分にそれができるとは思ってはいない。
だから、託す。
「あなたの言う通り、私じゃ、あなたと共には行けない。だけど、だから、信じる。あなたが魔族を滅ぼしてくれるって。私の復讐を、してくれるって」
レナリーは真っ直ぐ青年に目を向けた。青年はその目を真摯に見つめ返し、鼻で笑う。
「お前の復讐？　そんなもん、俺には関係ないな」
青年はレナリーに背を向け、その腰に携えた剣を鞘から抜いた。
「だが、背負ってやろう。その代わり、感謝しろ。俺に感謝しろ。俺を讃えろ。俺を褒めろ。この世にある全ての賛辞を俺に捧げろ。

そうすれば、背負ってやる。お前の復讐を。魔族に殺された全ての人々の復讐を。憎悪を。怨念を。怒りを。恨みを。全ての負の感情を背負ってやる。そして、魔族を滅ぼしてやる。殲滅してやる」

青年は剣を掲げ、誓うように叫ぶ。

「俺の生は俺の為にある。故に、俺は俺の為に他の業を背負おう。他の悪意を背負おう。賛辞を捧げられることは、すなわち俺の願いの一つだ。故に、他の業や悪意を背負うことにより、他から賛辞を捧げられる為に、俺は他の願いを叶えよう。讃えよ！　さすれば、俺はその為に力を尽くそう！　全ては我が欲望の為に！　夢の為に！　理想の為に！　俺は、魔王を倒す者だ。己の為だけに生きる者だ。俺は俺の為に、全てを背負おう！　それを、ここに誓おう」

言い終えると、青年は剣を下ろし、レナリーの方を振り向いた。

青年は優しく笑っていた。

それにつられて、レナリーも笑った。

「じゃ、ここに立て」

地面に何かの紋様を描くと、青年はそう促した。

「ここに？」

レナリーは不思議そうに首を傾げた。

「ああ。今、ここを指定した。一度使えばもう二度と使えないような簡易的な指定点ではあるが、それでも一度は使える」

青年は何でもないように言ったが、こんなことが可能であるということは魔法学を学んだことがある者ならば充分驚愕に値する。簡易とは言っても、転移指定点は転移指定点である。転移指定点を刻むことは、魔法学を数年学んだ者でやっと可能かどうかというところだ。そして、それは刻むことが可能であるにすぎず、それにかかる時間は途方もないものである。魔法学の権威であっても、数日はかかるはずだ。簡易的なものであっても、それにかかる時間は数時間以上であろう。

それを青年はたったの数分でやってのけたのだ。その凄さは異常

とも言える。
　無論、レナリーは魔法学など学んだことがないので、その凄さがわかるはずもなく「そうなんだ」としか応えることはできなかった。
「あっちに着いたら、ちゃんと俺について話せよ。そうすれば、待遇がかなり良くなるはずだ。俺はあいつに借りがあるし、あいつは借りを返す奴だ。どっかの王よりは無能だが、そこだけは信頼しても良い」
「魔王を倒す者、って言えば良いんだよね？」
「ああ。そう言えば伝わるだろう。魔王を倒すなんて言う奴は、俺くらいだろうからな」
　レナリーは青年が描いた紋様の上に立った。青年は満足そうにうなずく。
「じゃ、飛ばすが、準備は良いか？」
　青年が地面に描いた紋様に手を添えた。
「うん。……あ、ちょっと、待って」
「なんだ？」
「ありがとう、って、言いたくて」
　青年ははっと顔を上げた。すると、レナリーは笑っていた。
「そう言えば、言ってなかったから。どうしても、言いたかったの」
　レナリーは恥ずかしそうに笑う。それを見て、青年は呆然としていた。
「あの魔族を殺してくれて、ありがとう。村のみんなの仇を討ってくれて、ありがとう。そして、私を助けてくれて、ありがとう。あなたがいなかったら、私はきっと死んでいた。
最初は、なんで助けたのか、そう思った。村のみんなが死んだんだから、私も一緒に死にたかったんだ、って。だけど、本当は、違うの。私、生きることができて、とっても嬉しかった。私は、生きたかった。どうしようもなく、生きたかった。死にたくなかった。だから、とっても嬉しかったし、感謝もしてる。
　ありがとう。この恩は、一生忘れたりしない。私は、あなたを忘

れない。あなたに、この世で一番の幸運がありますように」
　レナリーはそう言って、胸の前で手を組んだ。祈るように、手を組んだ。
「そう、か。そう、なのか。……は、ははっ」
　青年は嬉しそうに笑い始めた。本当に、心の底から嬉しそうな笑いだった。
「……ありがとう。俺からも、言っておくよ」
　青年の言葉にレナリーは一瞬、不思議そうな顔をしたが、すぐにその顔を笑みに変えた。
「うん。どういたしまして」
「じゃあ、飛ばすぞ。もう、何もないな？」
「ないよ」
　レナリーが言うと、青年は描いた紋様に添えた手に魔力を流した。すると、魔力は手から紋様へと流れて行く。紋様が光り、レナリーの身体を包み込む。
「さよなら。またね」
　その声と共に、レナリーの姿は光と共に消えた。
「……ああ。必ず、いつかまた」
　青年は剣の一振りで紋様を消した。

○　○　○

「さて。そろそろ征くか」
　魔王の前には数十の魔族が跪いていた。
「待ちくたびれましたよ、魔王様」
「第七だけでなく、第十五、第十八、第二十四までもが今までに殺され、しかし、ずっと待機をしてきました。しかし、やっと、できるのですね」
　歓喜が声に滲み出ていた。それほどまでに、彼らは喜んでいた。
「左様。テストも予想通りであったからな。千分の七。それだけし

か、此度の襲撃では殺されなかった。それほどまでに、人間どもは、油断している。故に、今こそ、征く時だ」
魔王がその顔を不敵な笑みに歪めた。
「我が此処に命ずる。人間どもを、駆逐せよ」
魔族たちは雄叫びで応えた。
とある少年が第七エレクトロを殺してから、三年の年月が流れていた。
エレクトロが殺されてから、魔王は驚くべき命令を下した。
――人間を殺すな。
それはエレクトロを殺され、激昂していた魔族にとっては尋常もなく難儀なことだった。
しかし、魔族たちはそれを達成した。
達成できた理由、それは魔王の命令は絶対であり、正しかったからだ。
全ての魔族は魔王をこれ以上なく慕っていた。それは、魔王が強かったから、という理由だけではない。
強さだけでこれほどまでの統治を成すことは不可能だ。しかし、魔王はやってのけた。
それは魔王がそう言う魔族であった、と言う他ない。
全ての魔族に、この御方に従おう、と思わせた魔族であった、と言う他はないのだ。
魔王の強さに惚れ、魔王の意志に惚れ、魔王の思想に惚れた。
魔族たちは、魔王をこれ以上なく慕っていた。
故に、人間を殺すな、というような命令を受け入れたのだ。
そして、その命令は魔族たちが期待した通り、意味ある命令であった。
人間を完全に駆逐するための、意味が。
魔族は人間とは違い、その魔力を増やすことはできない。
しかし、その魔力は自然に回復していくのだ。魔族から奪うことでしか、魔力を回復することのない人間たちと違って。

故に、魔王は魔族たちに『人間を殺すな』と命じた。
人間を殺すな――今の彼らに人間を殺す以外の業務は存在せず、故にその命令は、待機しておけという意味だ。
全ての魔族がそれを実行すればどうなるか。
その結果が、現在の状況である。
人間側から攻め込まない限り、人間は魔族を殺すことはできず、つまり、人間は魔族から魔力を奪うことはできない。
しかし、人間たちにそんな戦力がある者は圧倒的に少ない。
無論、例外は存在する。エレクトロを殺した人間や、その人間が手を貸したと思われる軍の者。彼らは魔族に攻め込むだけの力を有していたし、実際に、攻め込んだ。その結果、殺された魔族も存在する。
当然のことながら、攻め込まれた魔族は戦った。人間を殺すな、と命令されていたが、同時に攻め込まれた場合はその限りでないとの命令もされていたのだ。
しかし、その魔族たちは殺された。
まず第十五、第十八、第二十四といった将軍。彼らは第七エレクトロを殺した人間が殺したと考えられている。
その他に殺された魔族は、人間の大国に隣接した場所はその国の軍によってと考えられているが、人間の大国から離れた場所の魔族はすべてエレクトロを殺した人間と同一人物であるとも考えられている。
そのようにして、魔族は殺された。
しかし、それは準備でしかなかった。
魔族が人間に侵攻する、準備でしか。

×××

青年はその脚から魔力を放出し、物凄いスピードで移動していた。
青年の眼前には魔法によって描かれた地図のようなものが浮かび

上がっている。
青年の目的地は、人間の集落。それ以外には特に決めておらず、とりあえず人間がいる場所であれば何処でも良かった。
何故青年がそんなことをしているのか、それは青年の目的成就の為であった。
青年の目的とは、全ての魔族を駆逐すること。
だが、そんなことを青年一人でできるはずもなく、故に、青年は自分と共に魔族を駆逐する仲間を探していたのだ。
国があれば、その軍に力を貸し、王に恩を売り、魔法の才がある者を探すと言った風に、青年は仲間を探しながら、その国自体を強化していた。
魔法を研究している場所があれば、それに力を貸し、研究結果を貰ったりした。
青年はそのようにして、世界を巡っていた。
ただ、魔族を滅ぼすために。
「お」青年の視界に、街らしきものが映った。青年は方向転換し、その街らしきものまで行く。門に着き、青年はその脚から魔力の放出をやめた。
門には二人の衛兵が呆けた様子で立っていたが、青年の姿を見るとその手に持つ槍を青年へと向けた。
「何者だッ！」
「世界を巡ってるんだよ。わかったら、それを収めろ」
青年は衛兵を睨んだ。いきなり槍を向けられて良い気をする者はいないだろう。
衛兵はびくっと身体を震えさせた。だが、槍は収めない。
「収めない、か。まあ、収めたら収めたで駄目だが。それにしても、毎度毎度面倒臭いことだ。魔族の襲撃はここ数年ないってのに人間がその戦力を維持しているのはありがたくもある。だが、魔族と言う敵がいるにも関わらず、未だに人間同士で戦争してるってのは、やっぱり愚かとしか言えないよな」

青年は呆れたように溜息を吐き、その手を衛兵たちに向けた。
衛兵たちはその手を見て驚き、ぺこぺこと頭を下げた。

「権力に屈するのは当然であり、屈しなかったらかなり面倒だが、やはり好かんな」
青年は自分の手の甲に刻まれた紋様を見て言った。魔力を流した時に浮きあがるようにされた紋様である。この紋様はこの国の王にしか刻めないものであるらしく、つまりその紋様を刻まれた者は国王に認められたという証を得たことと同義となるらしい。
「って言っても、これくらいの魔法なら、解析すれば簡単にできるんだがな。俺じゃなくても、今ならけっこうな数の人間ができるだろう。グローリーとかリストとかなら、これを見せただけで三時間も経たず完全に模倣できるようになるんじゃねぇか？　俺は実際に刻まれたから、一秒とかからなかったが」
言って、青年はくっくっと笑った。あの時の王の顔は忘れられない。自分の力量を認めたからこそ、この紋様を自分に刻んだんだろうが、あそこまで早く解析されるとは思ってもみなかったんだろう。確かに、数年前までの自分なら数分はかかっただろう。しかし、魔法学は常に発展し続けている。それは、自分も同じことだ。
軒並みいる魔族が襲撃を仕掛けてこなくなったせいで、わざわざ自分から魔族の方に出向かなくては魔力を補給できなくなってしまった。元より魔族は駆逐していくつもりだったから別に良いのだが、やはり自分から出向くのは面倒であった。
一つ魔族の拠点を見つけると、そこにはかなりの数の魔族がいるのだ。それを倒しただけ青年の魔力は増加するわけであるが、逐一倒していくのはやはり面倒くさかった。
無論、自分から出向くことによるメリットも存在した。人間を襲撃するような魔族は低級なものが多く、それから学ぶようなことは一切存在しなかった。しかし、魔族の拠点にいる魔族の中には強い魔族もいた。

青年が今までに戦った中で単純な戦闘能力が最も高かった魔族は第七将軍エレクトロとかいう犬っころである。あれからは見たことも聞いたこともないような魔法を学ぶことができた。もしも自分と同じほどの頭を持っていたのなら、確実に自分は負けていただろう。少なくともそれほどには強かった。

あれが始めて戦った「将軍」という位の魔族であった。そしてそれ以降、青年は合計三匹の「将軍」を殺した。そのどれもが強大であり、中にはエレクトロよりも厄介なものもいた。しかし、青年が常に成長していた。エレクトロと戦った頃ならば苦戦しただろう敵も、今ならば苦もなく、殺すことができる。

「そもそも、犬っころとは相性が良かっただけなんだよなあ。あいつがあそこまで正々堂々と戦わなかったら、俺は確実に負けていただろうし。先が読めすぎるんだよな、あいつは。もし人間だったのなら、俺がしっかり教育してやったんだけどな」

青年は溜息を吐いた。むろん、そんなことは叶わぬ夢であり、ただ「もしもそうであったのなら」ということを言っているだけである。

「っと。ここ、かな」

青年は歩を止め、目の前に立つ門を見る。街の外門ほどではないが、結構な大きさだ。

「何者だ」

そう言う門番に向かって、青年は手を門番へと向けた。すると門番は顔を真っ青にして耳に手を当てた。通信魔法を行使しているようだった。

内容を軽く盗聴すると、

《王紋を持つ御方がいらっしゃいました。お通ししますか？》

《どんな奴だ？》

そこで門番はちらと青年の方を見た。

《とても若い男です》

《ほう。それは、私より、か？》

《はい。貴方様よりも、おそらくは》
《それは面白いな。通せ。許す》
その声と同時に、通信魔法が途切れた。
「お許しが出ました。どうぞ、お入り下さい」
「ああ。御苦労」
門が開き、青年はその建物の中へと入っていった。

「貴様が、王紋を持つ者か？」
その女は、まだ二十歳にも達していないような女だった。
雪のような髪と肌。エメラルドのような目。唇は薄く紅い。長身で、すらりとした身体付きをしている。妖艶といった言葉が似合うような女だった。
「その通りだ。ほら」
言って、青年は自分の手を女に向けた。女は「ほう」と感嘆の息を漏らし、愉快そうに笑いを浮かべた。
「歳は？」
「十七」
「何故、それほどの若さで王紋を授けられた？」
「お前も持ってんだろうが。隠しても無駄だ」
その言葉に女は少しだけ驚いたような表情を見せた。しかし、すぐにその表情を笑みに変えた。
「何故、わかった？」
「俺ほど魔法に精通してると、無意識の内に魔法を解析しちまうんだよ。お前にかかってる魔法くらい、全てお見通しだ。その用心は良いが、客人を少しは信じてくれないかね。どんだけ魔法障壁を張ってんだよ」
「恐ろしいではないか。私もこの年齢だからな、色々と危険なのだよ」
「嘘吐け。俺が見る限り、お前はけっこうな魔法の使い手だろ。俺の足元にすら及ばないが、それでも、まあまあだ。魔族ならまだし

も、人間には負けないだろ」
「まあな。そのために、私はこの街に魔法学校を設けていないのだから。もし設けてしまえば、私の反乱分子が魔法を学び、攻めてくるかもしれないからな」
「やっぱりそうか。この街には魔法が少なすぎると思ってたんだ。てことは、魔法を使える奴は、全員外部から来た人間ってことか」
「左様。と言っても、全て私よりは劣っている者だがな」
「それでも、念には念を入れて、か。慎重すぎるぜ、お前」
「慎重すぎるくらいで良いのだよ。自らの命に関しては、慎重になりすぎるということなどないのだから。現に、貴様は私よりも強いだろう。この障壁は、こんな時の保険だ」
そう言って、女は不敵に笑った。それに、青年は暴虐な笑いで応えた。
「どこが保険だ、馬鹿が」
その言葉と同時に、青年は女の方へ手を向けた。
すると、どっ、という轟音が響き、女の前に張られていた全ての魔法障壁に大きい穴が穿った。
「俺くらいを相手にするなら、こんなもん、保険にもなりやしねぇ」
女ははっと顔を上げた。目の前に青年がいた。移動したことに気付かなかった。気付けなかった。
青年がいつの間にか女の眼前に立っているのを見て、周りの兵たちは自らの武器を構えた。「下げろ」青年が言うと、兵たちは一斉にその武器を下げた。むろん、兵たちは自分の意思で武器を下げたわけではない。青年がその言葉に魔法を込めたのだ。
「……で、貴様は私に何の用だ？　王紋を授けられている身で、私の命を狙うとは思えないが」
女は冷汗を垂らしながら、その気勢を弱めることはせず、不敵に笑いながら言った。
それに青年は感心したように息を漏らし、笑う。
「ま、そんなビビるな。お前の言う通り、俺はお前の命なんぞ狙っ

ちゃいない。ただ癖になってるだけだ。交渉をする時は、まず圧倒的優位を示した方が円滑に進むだろ？」
「それはただの脅迫ではないか」
「ああ、脅迫だ。俺は俺のことしか考えていない。お前が嫌でも、そんなこと俺には関係がない。俺は俺の為に、交渉相手の意思は踏みにじることにしてるんだよ」
「そんなことをして、貴様は何を望む？」
女はその表情を笑みに固めながら、怯えていた。自分の力を過信しているわけではないが、それでもこの青年の力くらいは解る。あれだけの魔法障壁を壊すことには、たとえ魔族であっても低級魔族であればできないだろう。上位の魔族でも、多少の時間は必要であるはずだ。
しかし、この青年はそれを一瞬でやってのけた。それは恐るべきことである。故に、女は警戒していた。この青年が何を望むのか。これほどまでの力を持つ青年は、何を望むのか。それはおそらく、人間にとって、いや、魔族にとっても、重大なことであるだろう。
そんな女の警戒を知ってか知らずか、青年はその表情を女がしてみせた笑みよりもさらに不敵な笑みに変え、言い放った。
「世界平和だ」
「……は？」
呆然。女の表情を一言で表すならば、それこそが最も適切であろう。
「世界平和、って、それは、本気で言っているのか？」
容易に信じられることではなかった。諸国の王、ましてや教会の者たちでさえ、魔族との戦いのことよりも自分たちの利を優先するような時代である。そんな時代に、世界平和を望む。それはとても崇高な考えであるが、とてもこの青年には似合わない言葉であった。
だが、青年はまるで当然のことのように頷く。
「無論だ俺は俺の為に生きている。そして、平和な世界で暮らしたいと望むのは、人間ならば当然の考えだろう？　故に、俺は世界平

和を望んでいるんだ」
「それほどの、力があって、何故、そんな夢を見る」
「これほどの力があるからだ。おそらく、俺は現在この世界にいる人間の中で最も強い人間だ。才能だけならば俺を超える逸材がいるかもしれないが、実際の能力であれば、俺は誰にも劣らない。それだけの力があるんだ。なら、夢なんかじゃない。世界平和は、とっても現実的な望みだ。俺は、世界平和を成就させる。俺の為に、な」
「どれだけ、傲慢なんだ。自分の為に、世界平和を成就させる？まるで、自分が世界の主であるような言い草だな」
「いずれ、成るさ。世界の主足る人間は、俺以外にも今のところ一人くらいはいるが、俺も世界の主には成りたいからな。俺は世界に平和をもたらし、世界の主となり、世界中から讃えられる。どうだ？　最高だろう」
「もしも、叶えられるであれば、な」
「叶えるさ。絶対に」
青年は自分に言い聞かせるようにして言った。
「……そうか」
女は含むような笑いをして、立ち上がった。
「名を言っていなかったな。私はシェーラだ。貴様は？」
「俺は魔王を倒す者だ。よろしくな」
「ああ、よろしく」
そう言って女――シェーラは青年へと手を差し出す。しかし、青年はその手を取らず、ただ驚きに目を瞠っていた。
「どうした？」
シェーラが首を傾げる。それを見て、青年はますます驚きに目を瞠る。
「……まさか、あの王以外に、この言葉を笑わない者がいるとは、な」
そして青年は楽しそうに、ふっと笑う。
「本当に、この世界は愛おしいな。お前みたいな奴がいるから、他

がどれだけ屑に溢れていようと構わなく思えてくる。感謝しよう。お前がいてくれて、良かった」
そう言って、青年はシェーラの手を取る。シェーラは突然そんなことを言われてきょとんとしたが、すぐに「こちらこそ」と笑った。

○　○　○

――魔族の勢力地に隣接した、とある人間の街。
そこは、昨日まで、魔族の動向に怯えながらも、数年間襲撃がないことから少し油断していた人々が楽しく暮らしていた街である。
しかし、今、この街には生きた人間はほとんどいなかった。
「ハッハァー！　良いぜ！　良いぜ！　その調子その調子ィ！」
ある魔族が嬉々として言った。
筋骨隆々。人間のような姿をしている。金の髪に浅黒い肌。唯一、人間にありえないものとして、二本の尾が生えていた。
「貴様も性格が悪いな。そんな姿で油断をさせてから、攻撃させようと言うのだから」
またある魔族が呆れたようにして言った。
金の体毛。狐のような身体。四本の尾は青く煌き、その目は紅い。
「ハッ！　そっちの方が良いだろゥが。あいつは、絶望を糧とする魔法を使うんだからヨ」
「それはそうだが、悪趣味だぞ。誇りを知れ、ゾォル」
「うっせェ。お前は俺の親かよ、ルイア」
「お前はそれで、第六なのか。嫌になるな」
「なんだ？　不満かヨ？　それなら魔王様に言うんだな。『魔王様ァ～。僕ちんゾォルなんかに負けたくないんでちゅ～。でちゅから、僕ちんとゾォルの序列を入れ替えて、あいつを第八にしてくだしゃ～い』ってなァ」
「……お前の部下が、不憫で仕方がないよ」
「ハッ！　それは同感だぜ！」

そう言ってハハハと笑うゾォルを見て、ルイアは溜息を吐いた。
「それにしても、あれは結構な出来だな。流石はチャイオニャ。こんな事に関しては、やはり一流だな」
「戦闘に関してはカスみてェなもんだけどなァ」
「しかし、頭が良い。貴様であっても、勝てるかどうかは解らんぞ？」
「ハッ！　俺様にそんな策略は通用しねぇよ。七と六に、どれだけの隔たりがあると思ってんだよ」
「七――エレクトロ殿、か」
「そうだ。あいつは魔法も一流。身体能力も一流。魔力の運用力も一流だった。だが、動きが読めやすかった。おそらく、それが敗因だろうな」
「読めやすかった、とは言っても、それだけで勝てるほど、エレクトロ殿は弱くないと思うが？」
「ハッ！　馬鹿かよルイア。人間は、頭だけは良い生物だ。『捕食』を除けば、それくらいしか長所がない。だが、だからこそ、その能力だけは俺らよりも上だと思っておいた方が良い」
「人間如きに？　それは流石に思えないな」
「いいから、聞け。それとも、お前は単純な能力で、お前より一つ上の序列であり、俺の一つ下である、第七、エレクトロが負けたとでも？」
「……それはない」
「その通りだ。エレクトロが単純な能力で負けるなんて、あの時の人間であれば考えられないことだ。同時期に、ディープリースを倒した人間がいた。おそらく、それがその時の『人類最強』だ。故に、エレクトロを倒した人間は、そいつしか考えられねェ」
ゾォルは大きく肩をすくめた。
「だが、ディープリースとの戦闘でその地に残った魔力を分析した結果、その時にはまだエレクトロには到底及ばない程度の魔力しか持っていなかった」

「人間は魔力を奪うのだろう？　なら、他の場所で魔力を奪って、それからエレクトロと戦ったのでは？」
「ありえないな。ディープリースが倒されてからエレクトロが倒されるまでの期間に、他の百位以内が倒されたという報告はないし、実際、ほとんどが未だに存命だ。結果、エレクトロは単純な戦闘能力ではなく、行動を読まれて負けたんだろう」
「しかし、どうやって……」
「簡単だ。あいつの魔法は、自分の存在を蔓延させる魔法。尾の先から常に自分の存在を放出し、自分の存在を限りなく薄い状態ではあるが、その場に蔓延させていた。それにより、本体に攻撃を受けたとしても、薄くなった存在の一部へ本体を出現させる。言っちまえば、転移魔法と創造魔法の応用だ。攻撃を受ける瞬間、自分の存在と言う転移点へと自分を移動させる。攻撃を受けた肉体とか、攻撃を受けると自動的に存在を移すことができたのかは今でも解らねェが、それはエレクトロの魔法だから、俺らに理解できるもんじゃねェ。俺らは人間とは違って、一つの器官として魔法を行使しているようなものだ。理論を組み立てて魔法を行使しているような人間どもとは違う。まあ、感覚的に使っているからこそ、人間では不可能だろう速度で魔法を行使できるわけだがな」
「話がずれているぞ、ゾォル。魔法などどうでもいい。どうやってエレクトロ殿が倒されたのか。私はそれが知りたいのだ」
「ん？　すまんすまん。確かに少し話が脱線したが、完全に無関係というわけでもない。つまり、エレクトロの魔法は、簡単に言えば転移魔法だ。なら、その転移先に、罠を張れば良いとは思わないか？」
　にやりとゾォルは暴虐の笑みを浮かべた。
　一方、ルイアはその言葉に驚愕を隠し得なかった。
「そんなこと、が？　いくら先が読めるとはいっても、そこまでのことを？」
「可能だ、人間には」

ゾォルが何でもないことのように言った。
「人間を擁護するわけではないが、それだけは認めても良いと思えるところだ。魔王様やシャム様といった魔族でやっと可能かどうかというその所業を、人間ならば、可能なんだよ。少なくとも、俺にはそれ以外で、エレクトロが人間如きに負けることが信じられない」
「だが、可能なのか？　エレクトロ殿の転移するだろう場所を先読みし、そこに罠を張るなど」
「おそらくな。しかも、ただの一発でエレクトロが負けるはずがねェ。簡単に言えば転移魔法だが、あいつの魔法はもっと奥が深いものだ。もし一度先を読まれたとしても、その罠にかかった時点のエレクトロは既に次の魔法を準備していたはずだ。つまり、エレクトロは無傷でまた違う場所に転移する。だが、その先にも罠が仕掛けられていたら？　さらにその先にも、またさらにその先にも、そのまたさらにその先にも、罠が仕掛けられていたとすれば、どうなる？　まあ、それくらいの数じゃあ、エレクトロには屁みたいなもんだろう。しかし、それが無限に続いた場合、いずれエレクトロの魔力は尽き、その罠に、かかってしまう」
「そうか。エレクトロ殿の、あの魔法はかなり高度な魔法だ。そもそも、エレクトロ殿にとって、あの魔法などおまけみたいなものだ。もしもの時の保険。あの魔法が主力なわけじゃない。エレクトロ殿にダメージを負わせるほどの攻撃が、エレクトロ殿に直撃した場合にのみ、あの魔法は発動される。そして、ただの転移魔法ですら、けっこうな魔力を消費するのだ。エレクトロ殿のことだから、転移魔法よりは消費量を少なくしていただろうが、それでも、それが何度も続けばすぐに魔力が尽きるのは必至、か」
「それだけの数、あんな魔法を使うなんてのは完全に想定外だっただろうからな。それならそんな魔法、途中で止めればいい話だが、そうもいかねェ。最初の数回でエレクトロも気付いていたはずだが、止めることはできるはずもなかった。エレクトロの魔法が発動すると言うことは、それなりの魔法だと言うことだ。そして、一度エレ

クトロの魔法が発動した時点で、次にエレクトロが出現する場所にはその罠が張ってあることが確定しているも同然。気付いてすぐに魔法を解除し、その罠に直撃したとしたら、魔力が尽きることはないだろうが、あんな魔法、一度解除して早々また出来るもんじゃねェ。すぐに他の魔法で攻撃され、魔力を奪われていただろう」
「故に、賭けたのか、エレクトロ殿は。相手が、先読みを誤ることを、狙って」
「結局、失敗に終わったがな。ま、だけどエレクトロは満足だったと思うぜ。最期に、そんな奴と、戦うことができたんだから」
「……ああ。エレクトロ殿は、そういう御方だったからな」
ゾォルとルイアが言い合い、空に思いを馳せた。
そこに、「ギィィィイアァァァアアアアア！」と猛獣のような声が空気を揺るがした。
「っと、忘れてた。そうだそうだ、今はこいつの実験の最中だったな」
「そうだったな。私も忘れていたよ。しかし、何故私たちがチャイオニャの実験などに駆りだされねばならないのだろうな」
「まあ、良いじゃねェか。少なくとも俺は、面白いぜ？」
ゾォルとルイアの視線の先に、真っ赤に濡れた一体の魔族がいた。
背には常に蠢き隆起する肉腫。腕が四本生えており、そのどれもが形状の違うものだった。一本は枝の如く貧弱な緑色の腕。次に大きな黄色の腕。次にツギハギだらけで折れ曲がった腕。最後に手首までが真っ白で、手首から先は真っ黒な、人間と同じような腕。
体長は三メートルほど。身体は人間のよう。腕とは違い、脚は二本で、普通の人間と同じようである。頭は常に左右どちらかに傾いており、口と目は塞がれている。口は糸で縫われたようにして、目は包帯に巻かれるようにして。目から上は鉄が覆いかぶさるようにしており、それに付属してある突起物が時折黄色く点滅していた。
「魔族の魔力を奪って糧とする人間に対抗して、人間の絶望を奪って糧とする魔族を生み出す。最ッ高に面白いじゃねェか」

×××

シェーラの希望もあり、青年はシェーラの自宅に泊まることになった。

青年はその夜、こっそりとシェーラの寝室へと侵入し、シェーラを起こした。そこでシェーラは動揺したが、「ま、まあ、良いだろう。貴様ほどの者ならば、その子も、さぞ強いものになるだろうしな」と言って、青年をむやみに追い出すようなことはしなかった。

しかし――青年からしては当然のことながら、青年は何も夜這いに来たわけではなかった。ただ、二人だけで、この街の現状を話してもらいたかったのだ。これだけの若さならば、内部に敵がいてもおかしくはない。故に、部下がいるところでは話しづらいだろうことも話してくれるだろうと踏んで、青年はわざわざ夜寝る時間にシェーラの寝室に忍び込んだのだ。

その旨を話すとシェーラはその雪のような顔を少し溶かし、「紛らわしいことをするなっ」と怒った。

それに青年は肩をすくめ、

「俺もそういうことをしたくないわけじゃあない。お前ほどの美貌を見て、興奮しないほど俺は聖人君子ではないさ。お前に言ったかどうかは忘れたが、俺は自分の欲望に忠実でな。本音を言えば、今すぐにでもお前を押し倒したい。俺にはそんな経験がないから、もしするとなるとお前にリードしてもらうことになるだろうがな。しかし、今はそんなことをしている場合じゃないんだ。俺は、一刻も早く、俺の夢を叶えるために、動かなければいけない」

と言った。しかし、シェーラはその言葉に雪を蒸発させるように怒った。

「リードなど、できん！　私も、そんな経験はゼロだ！」

「あ、そうなのか？　お前の性格を考えると、政略として、その美貌を使うだろうことは容易に考えられるが」

「悲しいことに、この国の領主のほとんどは女性だ。そして、貴様も王紋を持っていると言うことは、陛下の性格を知っているはずだ。あの方は、私たちを娘のように思っている。故に、私が隣国の権力者を落とそうと思っても、何もさせてはくれぬのだ」
「……あー。あいつ、人は良いが、馬鹿だからな」
「そうだ。あの人は人格者だが、王としては情が深すぎる。もっと非情であれば、この国ももっと発展しただろうに」
「はたして、本当にそうかな」
愚痴を言うシェーラに、青年は含むように笑った。
「あの人柄があったからこそ、あれだけ優秀な部下がついてきたんじゃないか？　そして、あの人柄だからこそ、隣国とも良好な関係を築いているんじゃないのか？　少なくとも、俺はそう思うがな」
「……考えすぎだ」
「いいや、そんなことはない。あの人柄のおかげで、お前はまだ純潔を守っているんだ。それについては、感謝しても良いんじゃないか？」
「……貴様は、純潔を守っている女性の方が、好みか？」
「いや、そんなことはない。好き嫌いなんて、そんなことで決まることじゃあない。人を好きになるなんてことは、理屈じゃない。感覚だ。まあ、魔法と同じだな。強引に理論を並べることはできるが、その本質は感覚でやっているにすぎない」
「そ、そうか」
シェーラは顔を赤らめて言い、しかし、その直後、はっとして言う。
「貴様、今、何と言った？」
「ああそう言えば、理論と感覚の循環による魔法行使効率の上昇は、世界中に教えているわけじゃあないし、お前が知らなくても当然か」
「……それは、なんだ？」
訊ねると、青年はシェーラの身体をくまなく見た。それにシェーラは少しだけ恥ずかしくなって、「何を見ている」と身体を隠した。

「ま、お前になら、教えても良いか」
青年は言って、シェーラの額に手を当てた。シェーラは身体をびくんと震えさせた。それはなにも青年の手が額に触れたことに対して、シェーラが何らかの感情を覚えたことによるものではなく、青年の手から魔力が流れ込んできたからだ。
「昔は口頭で教えてたんだが、今はそういうわけにもいかない。つうか、あんな漠然とした思考を与えるだけじゃあ、本質に至るには遠すぎる。故に、これを教えるときは、魔法で直接教えているってわけだ」
青年の手が光り、シェーラの頭にイメージが浮かぶ、それはヴィジョンとなり、シェーラの視覚へ明瞭に映し出される。いや、視覚ではない。もっと根本的な――「感覚」としか呼べないような、自分の「心」に直接刻みこまれているような、そんな気がした。
「無論、これを世界中、誰にでも教えていたら、今の魔法学ももうちょっと発展していただろうし、魔族に対しても少し優勢になったかもしれない。だが、それより先に、人間は馬鹿だから、人間同士の戦争にこの技術を使ってしまう。魔法の行使時間が短縮されれば、人間同士の戦争も大幅に短縮されるのは道理だろう？」
糸。編む。魔力。魔法。感覚。理論。循環。構築。漠然としたイメージ。確固たる理論。様々な言葉が理論として理解され、様々な理論が感覚として感じられて、様々な感覚が言語として表現できて――その循環。魔力から魔法を構築するまでの動作のイメージが一つの円環となり、それは言語、理論、感覚を通過する際に加速する。全てが相互に影響し、単一では考えられないほどの大きな効果となる。
そうか。そうだったのか。
シェーラは唐突に理解した。
魔法とは、どういうものだったのか。
それは、魔法の成り立ちを考えれば、簡単にわかるはずのことだったのだ。

元々、魔法は魔族のものだ。
そして、人間の扱う魔法とは、魔族の使う魔法を解析し、理論として強引に成り立たせたにすぎない。
その本質は、感覚。
身体を動かすことと、同じようなものなのだ。
しかし、それだけを使うのはもったいない。人間には理論もあるのだ。ならば、それを使わずして何を使う。理論と感覚。その二つを同時に使うのだ。そうすれば、人間は魔法を、もっと効率的に扱うことができるはずだ。だが、感覚をすぐに理論とすることは難しく、ならば言語にすればいい。感覚は言語として表現することができ、言語から理論は構築されているのだから。
すべて、わかった。
到達した。いや、やっと、始めることができる。
魔法を行使すると言うことを。
「よし、終わったな」
青年はシェーラから手を離した。
「……今の、は」
シェーラは呆然として、やっとのことで声を出した。
「とりあえず、魔法を使ってみろ。今の状態ならば、先の障壁よりももっと出来のいい障壁が、十秒とかからず構築できるはずだ」
青年に言われて、シェーラはとりあえずやってみることにした。
魔力が完全な魔法に構築されるイメージが感覚され、それが言語として変換され、理論として確立される。そしてそれが感覚となり、後はもう魔法を発動するだけだ。
感覚、言語、理論を駆け巡り、循環し、加速する。
魔法はもう、完成した。
「……えっ」
シェーラは思わず、そんな声を出していた。信じられなかったのだ。今、自分がしたことが。
あれだけ構築するのに時間がかかったはずの障壁をゆうに超える

ほどの障壁が、ほんの数秒でシェーラの周囲に張られていたのだ。
「上出来だ」
青年が言い、それにシェーラは驚いた。障壁が張られたにもかかわらず、青年は障壁内部にいたのだ。
「ん？　ああ、何故、俺がまだここにいるのか、か。先の障壁で拒絶する対象を感知する方法は解析していたからな。ならば、それと同じように錯覚させてやればいいだけの話だ」
簡単に言う青年に、シェーラは驚きを超えた呆れを隠せずにはいられなかった。
「貴様、魔法に関しては、本当に人類一かもしれないな」
すると、青年はふっと鼻で笑う。
「当然だ。魔王を倒すんだからな」
「そうか。そうだな。貴様は、魔王を倒す者、なのだから」
シェーラは羨むように、青年を見た。
青年はそれには何も言わなかった。
ただ、魔王を倒すという思いが強くなっただけだった。

翌日、青年は街に出ていた。
シェーラに話を聞いた限り、この街に魔族が襲撃したことはないらしい。しかし、人間に襲撃されたことはあるらしく、余所者に対する視線が少々きついものであるのもそのためであろう。
「魔族と戦争してるっつーのに、なんで人間は人間同士で戦うのか。全員、もっと利己的に考えろよ。理性的に利己的に考えれば、全体の利益が個人、つまりは自分の利益につながると言うことが解らないのか。個人の利益のみを追求した場合のデメリットを考えないのかよ。全体を蔑ろにした場合、その個人は全体にとって不利益な存在と思われる。それが既にデメリットだし、それによって様々な不利益が生じることになる。争うのではなく、協力することが人間にとっては最善なんだ。自分が得をして、誰かが損をするのではなく、どちらもが得をするような関係が理想なんだ。誰かが損をするとい

うことは、自分が損をするという可能性もあるということだ。自分が誰にも損を与えなくとも誰かが自分に損を与えるかもしれない。だが、自分が損を与えなかったら、誰かが自分に損を与えないようになることは来ない。自分から始めなければ、何も変わりはしないのだから」

青年は独り言を口にしていた。長年一人旅をしていると、独り言が癖になってしまうのだ。少なくとも青年はそうであった。

「つうか、魔法のおかげでせっかくバベルの塔をぶち壊される以前の状態と同じ状態になったってんだから、戦争はなくなって然るべきなんだがな。言語が統一されたとしても戦争が起こるんじゃあ、神が言語をバラバラにした意味ってなんなんだよ、ってなるしな」

青年の独り言は周りの者にも聞こえているだろう。しかし、青年はそんなことは気にしない。そんなことを気にしている余裕などないのだ。

青年はほどんど無意識の内に独り言を口に出し、そして意識的に魔法を使って選別をしていた。魔法の才能の選別。自分の仲間となるべき存在の選別を。

青年の眼球には現在とある模様が刻まれており、しかしそれは普通の人間に見えるものではなかった。魔法の熟練者であって、ようやく見えるような模様であり、それは驚くほど緻密な魔法であった。

魔力の消費を最小限にし、かつ精度を最大限に引き出すためには緻密な魔法を編まずにはできなかったのだ。この魔法を青年は一週間以上の時間を費やして完成させた。そして、完成させた今でも毎日のメンテナンスは欠かしていない。

それほどまでに、青年にとって仲間を探すというのは重要なことだったのだ。青年のような、魔族すらも超える魔法の才を持つ者はこの世界には圧倒的に少ない。グローリーやリスト。あの王や、シェーラでやっと中級の魔族の才を超えるほどなのだ。青年の教えもあって、今では上級魔族と戦えるレベルまでは到達しているかもしれないが、それでも尚、弱過ぎる。

青年が今までに会った中で、最も強い人間は青年の師匠だった。しかし、あの人でさえ、青年の才には遠く及ばなかった。彼は青年の目の前で殺され、そして、彼を殺した魔族ですら、青年は殺すことができた。十二歳の時点でその域に達するほどの才を、青年は持っていたのだ。

そして今、青年が探しているのは、そんな自分に匹敵するほどの才能を持つ人間である。

実のところ、魔王が相手じゃなければ、そんな人間は必要ないと青年は踏んでいた。そもそも、倒した魔族の魔力がそのまま自分の魔力として奪うことができるこの世界において、仲間などは必要がないに等しいのだ。逆に仲間がいればその分、自分が奪うことのできる魔力が少なくなるので、仲間がいない方が良いとも言える。

しかし、青年は魔王の存在の為に仲間を探していた。青年は魔王を倒す者と自称しているが、自分が魔王を倒せるとは思っていなかった。魔王の魔力量は、それこそ桁外れのものであったのだ。これからの自分の成長から考えて、それでも、遠く及ばない。更には、あの時、北地区に残った魔王の魔法の残滓を見て、青年は確信していた。魔法の技術すら、魔王は驚くほどのものを持っていた。少なくとも、今の青年は超えるほどの技術を。魔王と戦う時には青年も魔王と同じだけの技術を得られると予想してはいる。だが、それ故に、仲間が必要なのだ。

同じ技術の高さで、圧倒的なまでに違う魔力量。勝てる道理などない。

しかし、仲間がいれば、その戦術は倍以上に膨らむ。そうすれば、勝つことができる。青年はそう思っていた。

「……本当に、人間は戦争なんかしている場合じゃない。魔族を殺すために、一致団結させなきゃ、な」

青年は独り、呟いた。

○　○　○

「フッ！　ハッ！　ハッ！　ハ！　ッハ！　ァァアアッハァア！」
特徴的な笑い声と共に魔力が放出され、その魔力はいとも簡単に人間の住む街がある山を一つ消し飛ばした。
「爽快だ！　久しぶりだぞ、こんなにも自由に魔法を行使できるのは！」
巨漢と形容するにふさわしい男。人間であれば東洋人のような短い黒髪と黄色い肌。
人間の男性のような体躯でありながら、一つだけ人間と違うところだあった。角である。その額から、一本の巨大な角が生えていた。
「さぁて、このオレ、第五テドビシュの眼に適う人間は、この地にいるかな」
テドビシュはにんまりと笑った。

「えー。なんでそんなのしなきゃなんないのー？」
ベッドの上でごろごろと寝転がっている魔族が言った。
人間の少女のような体躯。淡い水色の長髪に、シルクのような肌。しかし人間とは違うところがあり、それは尾であった。人間がイメージする悪魔が持つような尾を持っていた。
「魔王様の命令です。あと、その身体はお止め下さい」
ベッドから少し離れた場所である魔族が跪つき、言った。
命令で子犬の姿にしたその魔族だが、やはりこの姿にして良かった。可愛いもん、と少女の姿をした魔族は思った。
「でもでもー、これ、楽だしー。ピーピリープリーの気持ちもわかるって感じだしー。このベッドで寝転がるには、これが最適だしー。というか、魔王も人間の姿してるじゃーん」
「……それを言われると、何も言えないのですが」
子犬の姿をした魔族がしょぼんとして言う。やっぱりこの姿にして良かった。少女の姿をした魔族はにっこりと笑う。
「まあ、でも、魔王の命令なら、その仕事くらいはやってあげる。

確か、人間を殺せば良いんだよねー？」
「は、はい」
「りょーかーい。じゃあ、ばーん」
少女の姿をした魔族が窓に指を向けて、言った。すると直後、その指から一つの光弾が射出され、目にもとまらぬスピードでどこかへ向かって飛んで行った。
そして、数秒後、少女の姿をした魔族が居座る城すらも揺るがすほどの轟音とともに、空を覆い尽くすほどに眩い光が閃いた。
「はいっ。これで三千は死んだんじゃないかな。まあ、私、第二レプグラムからすれば、こんなの簡単ってわけよ。さて、もうすることないよね？　おやすみー」
レプグラムはベッドに身体をうずめた。

――魔族たちは少しずつ、人間たちに侵攻し始めた。
様々な方法で、着実に人間を殺していっていた。
だが、魔王は動かない。
ただ、その時に備え、力を温存するために。

第二節　―2―

光のような白に近い金髪と、その髪と同じような色をした肌。顔は幼げで、おそらく十五歳くらいだろう。その表情はひどく弱気で、今にも泣き出しそうである。

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい」

サヤは涙ぐみながらも、必死に謝った。何度もぺこぺこと頭を下げる様は、初めて見る者には少しの罪悪感を覚えさせるかもしれないほどのものであった。

「ごめんですむわけねぇだろ。お前、本当に役立たずだな」

しかし、幾度となく見た者からすれば、それはただ苛立ちを助長させるものであった。

男は不機嫌そうな顔でサヤを睨む。すると、サヤは悲鳴を漏らして身体を震えさせる。

チッ、と男は舌打ちした。サヤの行動の一つ一つに苛立ちを覚えているようだった。

「お前、謝ることだけは一流だな。それ以外は役立たずのクズなのに。そんなんで、よく生きていられるな」

サヤはその言葉の一つ一つに過剰に反応した。それがさらに男の苛立ちを助長させる。

「……あー。駄目だ。もう、駄目だ。さすがに、もう、我慢ならねぇわ」

すうっと男の目から光が消えた。

サヤはそれに気付くことはなく、ただ「ごめんなさい、ごめんなさい……」と繰り返していた。

「もう謝らなくていい。お前をこれから、役立たずじゃなくしてやる」

男は不自然なほど優しく言った。しかし、サヤはその不自然さに気付くことはなかった。

「ほ、本当に、そんなことが、できるんですか……？」
サヤは眼を涙で滲ませて、そこに希望の光が灯った。
「ああ。その通りだ」
また、男は不自然なほどに優しい声で言った。しかし、やはりサヤは気付かない。
「や、やった。やっと、やっと、誰かの、役に立てる。やっと、やっと……！」
サヤの目から涙が流れた。それは嬉し涙だった。その瞬間だけは。
がしっとサヤの肩を男の手が掴んだ。
「えっ？」
サヤは思わずそんな声を出して、男を見上げた。
涙で滲んだ視界に映ったその顔は、ひどく歪んでいた。
「ああ。これからは性欲処理の道具として役に立ってもらう」
どんっという音が響き、その音が鼓膜を揺らしたことで初めて、サヤは自分が押し倒されていることを認識した。
サヤは混乱していた。男が何を言ったのか、咄嗟には理解できなかった。
性欲処理の道具。
どう言う意味ですか。それって、どう言う意味なんですか。
サヤは純粋にそう思った。もしかすると、口に出していたかもしれない。むろん、知識としては知っている。しかし、その知識と今実際に起こっていることは決して繋がらなかった。繋げることをなにかが拒絶しているようだった。
男の手が優しくサヤの服を脱がしにかかった。懐からナイフを取り出し、丁寧にサヤの服を裂いていった。
サヤの服がはだけ、その肌が露わになる時、やっとサヤは自分が置かれた状況を理解し、悲鳴を出そうとした。
しかし、男の手がそれを制した。
見ると、男の顔は驚くほど冷静だった。その顔に罪悪感なんてものは微塵もなく、自分が何をしているかなんて、全く解っていない

ようだった。男は、まるで何かの作業をするみたいに、サヤの服を脱がし、サヤの口を塞いだのだ。
サヤはそれがひどく恐かった。あまりの恐怖に、涙が流れた。一度流れだすと、それは川の堤防が決壊したかのようにとどめなく溢れだした。しかし、涙がサヤの口を塞ぐ男の手をいくら濡らしても、男はその手を止めることはなかった。
サヤの肌がほとんど露わになった時、突然、男は服を脱がす手を止めた。乳房から上と、股の辺りがかろうじて布として隠されている以外に、サヤの肌を隠すものは何もなかった。
それをじろじろと舐めまわすように見ると、男はにたぁと笑顔を作った。それはサヤが今までに一度も見たことがないような笑顔だった。ここまで悪寒を覚えるような笑顔は、初めて見た。
何をしようと言うのか、男は自らの衣服を脱ぎ始めた。上半身には隆々とした筋肉が見え、下半身には棒のようなものが生えていた。
見たことはあったし、それが何であるかも知っていた。しかし、こんなものは見たことがなかった。なんだかとっても気持ち悪く、グロテスクなものだった。大きくそそり立つそれの先端は亀の頭に似ていて、その部分は少しきらきらと光っていた。
男はサヤの口から手を外して、サヤの股にある布を取っ払おうと、手をかけた。
「……やめて、ください」
サヤの口からそんな声が漏れ出た。その声は涙で濡れ、聞いている者の心を締めつけるような悲惨な声であった。
男もその声には心に響くところがあったようで、その息を興奮したように荒げ、自らのものを大きくした。
「やめて、ください。それだけは、やめてください。お願いだから。やめて。やめて……」
サヤは悲痛とも言える声を漏らし、男も悲痛とも言える息を吐きだした。その息と共に、男のものからはねばねばした透明な液体が滴り、それは男の太腿にまで達していた。

「もっと、言え。やめてくださいと。なんでもするから、やめてくださいって」
その声には興奮したものが混ざっていた。男の表情は嫌らしく歪み、サヤはその表情を見て、あまりの恐怖に失禁した。
「やめて、くださいぃ。なんでも、しますから、やめて、ください……」
サヤは失禁しながら、泣いてそう懇願した。サヤの股の辺りの布が濡れ、床に水たまりのようなものができた。その臭いはすぐに部屋に充満した。
「わかった。なんでもするんだな」
男はにこっと爽やかに笑った。その笑みは、どこか吹っ切れたような笑みだった。罪悪感から、完全に吹っ切れたような。
サヤはひっと悲鳴を漏らし、はずみでさらに失禁した。男の手すらもが少し濡れ、男のものから滴る液体はもう床にまで届いていた。
「じゃあ、これで、遠慮なく、やらせてもらう」
そう言って、男はサヤの股からその行為をするのに邪魔な布を取り払おうと、腕を振った。男の腕はサヤの股から離れ、つまり、男のものを邪魔するものはなくなった。
男は自分のものをサヤの股に突き入れようとした。しかし、おかしい。見ると、まだ、サヤの股には自分の手がかけられている。先ほど、自分の腕はサヤの股から離れてばかりだと言うのに。
そう思い、男はサヤの股から離れた自分の腕を見た。
手首から先がなかった。
は？　と男は思わず呟いた。自分の身に何が起こったのか、全く認識することができなかった。
「クズが。この俺の仲間となるべき存在に手をかけるなど、お前如きに許されたことじゃあない。それは、今から俺のものになるんだから」
若い男の声が聞こえた。
男はその声の方を見た。するとそこには、一人の青年がいた。そ

の手に、血を滴らせた剣を持つ青年が。
それを見た男の最初の反応は、自分の手を斬ったことに対する怒りを青年にぶつけるなどのことではなかった。
「ま、待ってくれ！　これは、俺が無理矢理やったことじゃあない！　あいつが、なんでもするからって、言ったんだ！　だから、俺は悪くない！」
男が最初にしたことは、言ってしまえば保身であった。自らの保身。慌ててサヤの上から飛び退き、手首から先がない腕をぶんぶんと振り回して、自分の罪を否定する。それこそが、男が真っ先にしたことであった。
「……人間って奴は、これだから」
青年は呆れたように溜息を吐いた。そして、その目は男には向けられず、サヤへと向けられた。
「で、どうする？」
「……え？」
どう言う意味かわからなかった。おそらく自分が問われているのだろうとは思うが、何を問われているのかわからなかった。
「こいつだよ。この、お前を襲った馬鹿を、殺すか、殺さないか。お前が選べ」
青年は男の首に剣を添えた。その動作は一瞬であり、男が剣を首に添えられているのに気づくことには少々の時間を要した。気付くと男は眼を潤わせ、「や、やめてくれ。こっ、殺さないでくれ。頼むから、なあ。なぁ……」と懇願していた。
しかし青年は男に目を向けることはなく、ただサヤを見ていた。
「なん、で……」
サヤの口が独りでに動いた。思ったことが、そのまま口から外に出た。
「なんで、そんなことを、私に……」
「お前が決めなければ、誰が決めるんだよ。もし、お前がどちらでも良いと言うのなら、俺はこいつを殺すぞ」

青年の言葉に、男は悲鳴を上げ、サヤに懇願するような視線を向ける。どうか、殺さないことを、選んでくれ。そんな感情と涙が滲んだ目を、サヤに向ける。

「それはっ！　……待って、ください」

その言葉に、男は顔を輝かせる。しかし、青年の顔は未だ険しく、サヤだけを見ていた。

「何故だ。理由を聞こうか。もし、こいつの視線を受けて考えたとか言う理由なら止めろ。こいつは死んだら何の影響力もない。お前がこいつの死に対して、何も恐れる必要はない。こいつが可哀想だとか、そう言った感情を抱く必要はない。思い出せ。こいつがお前に何をしたのか。何をしようとしたのか。今までのこと、たった今起こったこと。そして、こいつを生かした場合、これからこいつがお前にすることを、良く考えろ」

青年は男の首筋に剣を添えたまま、サヤに顔を近づける。

「これは一時の感情で決めることじゃあない。全てを想定した上で結論を出せ。お前がこいつを生かしておきたいのかどうか。それだけを考えろ。論理と感情を組み合わせ、互いを同一として考えろ。ただ自分がしたい方を、選びたい方を選べ。お前の望むままに選べ。そして、これを忘れるな。お前の意思で、こいつの生死は決定する」

青年はサヤを見つめる。サヤはその目に飲み込まれそうになっていた。そして同時にその言葉の全てが不思議と心に沁みわたった。

青年の言葉に、サヤは様々な感情を抱いた。

男の視線を受けたから「待って」と言ったのか。それは、おそらく、そうだ。自分は、あの視線を受けたから「待って」と言ったのだ。

しかし、それだけではない。それだけではないと、信じたい。

それ以外にも、色々な感情があって、だから、自分は「待って」と言ったのだ。

可哀想という感情もあった。自分が今までに何をされたのかも思い出した。自分がたった今何をされたのか、何をされそうになった

のかも思い出した。この人を生かしておいたら、自分がこれから何をされるのかということも容易に想像がついた。
だが、自分も、悪いのだ。
自分があまりにも役立たずだったから、彼は、自分にあんなことをしたのだ。
それを、忘れてはいけない。決して、忘れてはいけないのだ。
自分は、彼の生死を握っているのだから。握ってしまって、いるのだから。
一時の感情で、ただ今あんなことをされたから、されそうになったからと言うだけで、決めてはいけない。
論理的に考えれば、もしかすると、私はこの人を殺した方が良いのかもしれない。
感情的に考えれば、一時の感情で考えれば、私は、この人を、殺したいとまでは思っていないけれど、確かに殺したいほどの気持ちは抱いているのかもしれない。
だけど、論理と感情を組み合わせることなんてできない。
だって、私には、論理なんて難しいこと、わかんないから。
「私は、この人を、殺さない」
サヤは、はっきりとした声で言った。
「理由は？」
青年は感情が無いような目で言う。それに、サヤは意思のこもった目で返し、
「私は、この人を、殺したくないから」
意思のこもった声で、言った。
「……そうか」
青年は呟くと、いつの間にかその剣はどこかに消えていた。そして青年は男を見下し、
「目障りだ。どこかへ行け」
と言った。それに男は「は、はいぃ！」と情けない声を上げて、裸のまま部屋から出て行った。その両腕には、しっかりと手首がつ

いていた。
「……え？」
サヤは呆然と声を出した。しかし、その直後、青年に身体を抱えあげられた。
「え？」
またもやサヤは呆然と声を出した。そして、自分の今の姿を思い出し、ばっと自分の胸と股に手をやり、顔を羞恥に染めた。
そして、次の瞬間、サヤはなんだか凄い部屋にいた。
サヤからすれば、ただ凄いとしか言えないような部屋である。
ふかふかそうなベッド。壁もぴかぴかで、床には絨毯まである。
「え？　え？」
サヤは戸惑うように首を振った。突然のことに、頭が付いて行っていなかった。
「やっぱり、俺の見込み通りだ。ここまで付いて来れるとは」
青年は満足気に言ったが、何が付いて来れるのか全くわからなかった。いや、全然付いて行っていません。と言うのがサヤの心境であった。
そんなサヤの心情に気付いたのかどうかは解らないが、青年は言う。
「今のは転移魔法だ。かなり簡略化した部分もあるし、転移指定点とかの説明もいずれせねばならないが、今はまだ良いだろう。ただ一つ、お前ほどの才能がなければ、こんなことは不可能だったと言うことだけは、言っておこう。お前、自信なさそうだからな」
青年の言葉を聞きながら、サヤはそれに全く納得できずにいた。
「私に才能がある、って。それ、何の間違いですか」
その感情は、口から言葉になって出た。
「間違い？　そんなことはありえないな。俺の魔法は、絶対だ」
理解できないほどの自信がこもった言葉だった。しかしそれでも、納得できないものは納得できない。
「お前、本当に自信ないんだな」

青年はやれやれと言った調子で肩をすくめ、サヤを納得させるための説明を始めた。
「さっきの転移魔法は、お前ほどの才能がなければ不可能だったわけだが、お前がそれに納得していないのはその才能が何なのかを理解していないからだろう。故に、今のお前では到底理解できないだろうが、特別に説明してやる。
そもそも転移魔法とは転移指定点という点を指定しなければ発動することはできず、それは到達点と出発点の二つの点が必要なわけだ。
そこで、先の転移魔法についての説明だが、あれは出発場所に転移指定点を必要としないような転移魔法であり、それは特別な転移魔法なんだ。おそらく、世界でもこんなことが可能なのは俺とお前くらいのものだろう。
何故か。それはこの魔法が出発点を必要としない理由と密接な関係にある。
到達点は、転移先を指定するためのものであり、出発点は、到達点への発射台みたいなものだ。まあそんな簡単なものではないんだが、それはいずれ学ぶだろうから省略する。これらのことから、俺は出発点は転移魔法に必要ではないんじゃないか、そう思ったわけだ。そして、先の転移魔法が完成した。
しかし、問題点があった。それは、その転移魔法の特性にある。その転移魔法は出発点がするはずである肉体の魔力化、情報化を自身の身体のみでしなければいけない。出発点はその転移魔法をする人間の肉体を魔力化、情報化する機能があるわけだが、それは出発点だからこそ可能なんだ。道具を使わなければ、火を起こすことができないように、自身の身体だけでは肉体を魔力化、情報化することは不可能だ。――まあ、魔法によって火を起こすことは可能なわけだが、肉体を魔力化、情報化することは出発点がなければ、魔法であっても難しいわけだ。無論、難しいであって、不可能ではない。そうじゃないと、先の転移魔法はなんだったんだ、って話だからな。
ここからが本題だ。どうやって、それを可能にしたか。それを今

から説明する。
理論としては、俺以外に理解出来る奴などこの世界に数人いるかどうかってところだから省略するとして、簡単に言えば、魔力変換率の問題だ。魔力変換率ってのは、自らの魔力を魔法に変換する効率ってことだが、無論、それだけじゃあない。言い方を変えれば、魔力親和性って感じだな。魔力変換率＝魔力親和性と覚えておいたらいい。魔力親和性とは読んで字のごとくだが、簡単に言えば、魔力とどんだけ相性が良いかってことだ。そして、俺やお前はそれがずば抜けて優れているってわけだ。
それが何故、転移出発点が不要な原因となるかだが、それは簡単な話だ。魔力親和性が高いってことは、それだけ肉体を魔力化しやすいってことなんだから。……あー、これについては理解できなくても仕方がないか。まあ、魔力親和性が高いから肉体が魔力化しやすいってことだけを覚えておいたらいい。何故、魔力親和性が高かったら肉体が魔力化しやすいのか、って疑問は、今はどっかに置いておいてくれ。
つまり、先の転移魔法は魔力親和性が高い者ではないと不可能な魔法であり、イコール、お前は魔力親和性が高い、ってわけだ。そして、魔力親和性が高いってのは才能だ。故に、お前は才能があるってことだ。理解できたか？」
「……あの、その、えっと……」
サヤは口を濁した。全く理解できなかった。まず、何を話しているのかわからなかった。自分に才能があるかどうかという話なのはわかったが、肝心の内容についてはほんの少しも理解することができなかった。だから、結局、自分に才能があるとは納得できなかった。
「……そうだ。この街は、魔法学の勉強を全くしていないんだったな。それじゃあ、理解できなくとも仕方がないか。つうか、お前の才能は、魔法学について勉強してるんだったら、大陸中にその名が轟いてもおかしくはないほどだから、当然と言えば当然か。クソッ、

シェーラめ。いらん政策をとりやがって。おかげで、俺がここまで苦労するハメになったじゃねぇか」
　青年は顔をしかめて、ぼやく。その言葉の一つに、サヤは大変驚いて、
「シェーラ……って、領主さま？」
「それ以外に誰がいる。って言っても、簡単には信じられんか。この世界は未だ格差の激しい社会だ。まあ格差が激しいことについては反対ではないが、上の者と下の者の世界は全くの別だから、お前のようなやつからすれば、『上』であるシェーラに愚痴を、それも領主なんて位じゃなくてシェーラっていう名前で言うなんてのは、信じられんことなんだろう。いや、シェーラって呼び捨てにすること自体が、か」
　その言葉にサヤは何も答えず、青年はそれこそが答えだと受け取った。
「なら、実際に見せてやろう。そうすれば信じるだろ」
　青年はひょいと腕を振った。
　すると、青年が腕を振った方向の壁が跡形もなく消滅し、その先には一人の女性がいた。
　その女性は数秒それに気付かずに呆然としていたが、なんとなくこちらを向き、ぎょっとした。その顔は見覚えがある顔で、そんな顔は今までたった一度も見たことがなかった。
　全身が真っ白な、雪のような女性。
　この街の領主、シェーラその人であった。
「なっ、なな……！」
　シェーラは口をぱくぱくと開閉し、こちらをじっと見ていた。
　しかし、青年はそれを気にすることもなく、サヤに向かって、「ほら、シェーラだ。これで信じたか」と言ったが、サヤとしては領主さまであるシェーラがこちらを見ているだけで緊張なのに、その御方が驚愕の渦中にいるとなればもうどうしていいのかわからなくなってきているのである。故に、青年の言葉など、ほんの少しも耳

には入っていなかった。
「おま、えっ。なにを、しているんだっ」
ぴりぴりとした空気が肌を刺した。シェーラの身体から何かが出ていることが認識できた。いや、逆っていると言った方が正しいかもしれない。
そして、シェーラがこちらに腕を向けた瞬間、その腕から先ほどまでのはただ漏れていただけなのだと確信できるほどの何かの奔流が逆ってきた。
「さすがシェーラ。やはり、お前は中々の才能がある。しかし、それ以上に、こいつの才能には目を瞠る。魔法についての知識がほとんどなく、魔力量も初期状態のまま、魔力を感知できるとは。俺の目に、狂いはなかった」
しかし、青年はそれをいとも簡単に消し去った。どうやって消し去ったのかはわからなかったが、この青年が消し去ったと言う実感はあった。
「シェーラ。こいつはお前の街の人間だぞ。そんな奴にこんなもんぶっ放すな」
「貴様なら消せるとわかってのことだ！　今のは、ただの八つ当たりのようなものだ！」
「何を八つ当たりすることがある」
「壁を壊しただろう、が……？　なん、だ。これは。どうなっている。そこは、お前に与えた部屋のはずだ。それが、何故、この部屋の隣になっているのだ！」
シェーラは驚愕に満ちた表情で言った。
「ああ、すまんすまん。まあちょっと待て」
そう言って青年はひょいとサヤを持ち上げ、シェーラのいる部屋に入った。そして青年が「閉じろ」と言うと、驚くことに青年の背後には壁しかなかった。
「どうなって……もしや、次元の連結？」
「正解だ。お前、やっぱり才能あるな。俺が今までに見た中では、

一、二を争うほどだった。今はこいつがいるから、二、三を争うほどだがな」
「いや、だがしかし、次元の連結など、そうそうできるものではないはずだ」
「そうでもないさ。ようは転移魔法の応用だ。と言っても、次元の連結部は魔力だけを通すから、強い魔力親和性がなければ通ることはできないのだがな。しかし、これを応用すれば、かなりの規模の転移点。『門』と言っていいほどのものができあがる。すなわち転移門。そこを通るだけで、転移先に行くことができるような門が。無論、それの作成には転移点を刻むよりも多い時間が必要だがな。魔力変化術式を必要とせずに転移を可能とするほどの魔力親和性を有するのはこの世界に俺とこいつだけだからな」
「魔力親和性？」
「魔力変換率のこととでも考えろ」
「ああ、魔力との相性の良さか。ふむ、それは確かに魔力親和性と言えるな。つまり、転移魔法の理論に則っているのか。どれだけ魔力と近づいているのか。どれだけ魔力に近いのか。そういうことか」
「正解だ。やはりお前の才能は喉から手が出るほどに欲しいな。俺と共に来るか」
「貴様、答えがわかって訊いておるだろう」
「また正解。お前は優秀な生徒だよ」
　青年は手を叩いて笑った。サヤは話についていけずにおろおろとしていたが、突然、その頭を青年に軽く叩かれた。
「なら、代わりにこいつをもらっていく」
「私の街の娘か。それを許すと思っているのか？」
「思わないが、こいつの意思を尊重するのも領主の役目ではないのか。こいつがどうしたいのかは知らないが、な」
「それも一理あるな。……娘。そなたは、どうしたい？」
　問われ、サヤは困惑する。サヤのような者からすれば、シェーラなど天の上の存在。そんな御方と自分が同じ場所に存在しているこ

とがもうすでに信じられないのに、そんな御方が自分に話しかけてくださっていることなど、もっと信じられることではない。
しかし、これが夢であろうと、領主さまの言葉に答えないなどと無礼なことはできるはずもない。サヤは困惑した頭で必死に考えた。
街に留まるのか、街から出るのか。
その二択。
「……この人に、付いて行きます」
「そうか。なら、止める必要もない」
シェーラは青年の方を向いた。
「だが、その前に、訊ねておきたいことがある」
「なんだ？」
そして、シェーラは満面の笑みで首を傾げた。
「何故、彼女は裸なのだ？」
その言葉に、サヤは今の自分の姿を思い出し、赤面した。
「それを説明するのは少し、って、なんで魔力を循環させる。だが、その魔法はかなりのものだな。俺も認めてやっても良い。……おい待て。何をしようとしている。そこまで循環させた魔法は、俺でも対応するのが――」
「黙れ変態」
シェーラの身体を魔力が迸り、次の瞬間、その魔力はただ魔力を放出する何倍もの力を発現させる魔法へと変換され、青年に襲いかかった。
空気が凍り、床が凍った。
そこには巨大な氷ができた。
凍結魔法。
全てを凍結させる魔法。
だが、
「……危ねぇなあ。永久凍結なんて、俺でもまだ難しいのに。やっぱりお前は才能があるな。特に、凍結系の魔法の才能が。俺は凍結とか燃焼とか、そんな風に魔法を別の力に変換させるのは好きじゃ

ないから、凍結魔法だけを磨けば、凍結魔法だけならば俺を超えられるかもしれないな」
　青年は平然として、シェーラの真後ろに立っていた。驚き、見ると、青年の身体には黒い影のようなものが帯びていた。
「あの氷を溶かすのは、俺でも骨が折れる。あいつを避けるようにしたのは流石だが、もうちょっと範囲を限定できるようになった方が良いな」
　シェーラは、当然のこととして、サヤには凍結魔法を向けなかった。シェーラから見て先ほどまで青年がいた方向で、サヤだけはその氷の外にいた。
「これ……私が？」
　シェーラは自分で驚いていた。自分がこんな魔法を発動したことが咄嗟に信じられなかったのだ。確かに凍結系の魔法は得意分野だが、ここまでの凍結魔法など、今までにしたことがなかった。
「なんで驚いてんだよ。昨日、お前は変わった。そして永久凍結の理論の構築はそこまで難しいものじゃあない。……良く見るとこれは完全な永久凍結じゃないから半永久凍結と言った方が適切かもしれないが、ここまでの凍結魔法ならば凍結魔法の基礎理論さえしっかり把握していれば、後はできるかできないかだけだ。完全な永久凍結の場合は、時空間理論や座標指定の計算とか、次元との関係性、影響を考えての魔法構築が必要だから、今思えば、お前にはまだ早いか。そこまでの知識も経験も持っていないだろうしな」
「だが、これは今までのものとは、全くの別だ」
　シェーラは驚きを抑えに抑えた声を出す。青年は溜息を吐き、
「当然だろう。魔法の構築方法からして全くの別になったんだ。構築された魔法が変わらないわけがない。……と言っても、半永久凍結ならば」
　青年は氷に触れた。
「ちょっとずらすだけで終わりだ」
　直後、氷は跡形もなく消えた。

本当に、突然、消えた。
「な……ッ！」
シェーラは驚愕したように声を漏らした。信じられなかったのだ。今の魔法は発動した自分ですら驚くほどの出来であったのだ。それを、簡単に消し去る。これを驚かずして、何に驚く。
「……いや、そうか。貴様は、そうだったな」
否、実際は、驚くほどのことでは、ないのだ。この程度で驚いていてはいけないのだ。この青年は、魔王を倒す青年。これくらいのことを難なくやってのけなければ、そんなことを達成できるはずもない。
「魔王を倒すのなら、この程度のことは、できて当然か」
シェーラはふっと笑った。青年も微笑んだ。しかし驚愕に目を瞠る者がいた。
「魔王を、倒す……？」
サヤには彼らが何を話しているのか全く理解できなかった。しかし、魔王くらいは知っている。人間の敵。魔族の王。たった一人で他全ての魔族の戦力の総和を超える戦力を有すると言われる者。
それを、倒す。
それがどれだけ馬鹿げたことであるのかなんて知っていたし、酒に酔った男たちがふざけて言っているのを聞いたこともあった。それは実現不可能なことであり、そんなことを言ったとしても、それは確実に冗談である。
だが、彼らの目は真剣だった。本気でそれを達成しようとしていた。気が狂ってでもいるのか。最初にそう思い、だがすぐにありえないと確信した。青年の方がどうかはわからないが、シェーラがそうであるはずがない。しかし、そうであるのなら矛盾が生じる。魔王を倒すなどと言うのは妄言以外の何物でもないが、彼らはそれを本気で言っている。そして彼らの気が狂っていないとすると、彼らは冗談を言っていることになる。しかし彼らは冗談でそれを言っていない。矛盾。それ以外の何でもない。

「そのはず、なのに――」
それが不思議と、本当に、冗談なんかじゃない、本気の言葉のように思えて――
それが不思議と、この人ならばできてもおかしくないように思えて――
できるはずもない、不可能なことなのに。神を殺すと言っているようなものなのに。
それでも、何故か、不思議と――
「魔王を、倒す」
サヤは呟いた。呼吸をするように――自然にという意味ではなく、我慢しても、どうしても、吐き出してしまう息のように――呟いて、はっとした。
その言葉に、恐怖を覚えたのだ。
今までは何の現実味もない冗談であり妄言でしかなかったその言葉に、言えば笑いさえ起きることもあるようなその言葉に、サヤは、はっきりとした恐怖を覚えた。
何故か――現実味を、持ってしまったのだ。
本当に、魔王を倒すことを、つまり、魔王と戦うということが、現実味を持った、歴然とすらした未来の一つのヴィジョンとなってしまったのだ。
魔族を統べる王。それと、戦う。
そんなことは、想像したこともなくて、それどころか、サヤは魔族を見たことさえなかった。ただ、それがどういうことなのかは理解できた。そして、何故かその恐怖を明確に覚えた。ぼんやりとした、言わば、健康状態の時になんとなく考える「死」に対する恐怖のような曖昧模糊とした恐怖ではなく、死の際にまで迫った――サヤからすれば、先ほどの体験のような、すぐ近くにある恐怖、もうすぐ自分に降りかかるだろう災厄に対しての恐怖を、はっきりと感じていた。それも、その恐怖の大きさは、先ほどの体験で受けた恐怖よりも、大きかった。まだ体験していないし、想像すらできない

はずで、そもそもありえないようなことなのに――サヤには、これまでの人生にないほどの恐怖が感じられた。
「ぁ――」
がくがくと身体が震え始めた。背筋が凍り、涙が滲んだ。心臓の動悸が激しくなり、すっと顔から血の気が引いた。腰が抜け、思わずその場に座り込んだ。
その音で青年とシェーラはサヤの方を見た。すると、二人は驚いた。……と言っても、二人の驚きは全く質の違うものだったが。
「どっ、どうした？　そんなに身体を震えさせて……まさか、私の魔法でこの部屋の気温が下がったからか？　そう言えばまだ服も着ていないし」
「それに関しては大丈夫だ。しかし、これは俺の想像以上のようだな……」
シェーラは純粋な驚愕であり、青年は感心したような驚きであった。青年はにやりと口の端を上げた。
「シェーラ。服を用意してくれ。寒さが原因ではないが、そろそろ発つ。俺は自分の準備をしておくから、こいつを頼む」
「え？　あ、いや、おい待て！」
青年はシェーラの制止も聞かずに、シェーラの部屋を出ていった。シェーラはそれを見て憤慨しかけたが、どうにか抑え、そして一度だけ、深い溜息を吐いた。
「……とにかく、彼女をなんとかしないとな」
サヤは未だに恐怖に震えていた。

青年は歩きながら、興奮した頭を巡らせていた。
――これは予想以上だ！　まさか、あれほどまでに魔法の才があるとは思わなかった！　それも、人間的ではなく、魔族的、つまり、論理的ではなく感覚的な魔法の才。俺もけっこうな才能があると思ってはいるが、天才と呼べるほどではない。だが、あいつは天才だ！　俺ですら見たことがない天才。おそらく、この世界で一番の天

才だ！　総合的な能力が俺を超えることはないだろうが、魔法だけならば、いずれこの俺を超えるだろう。魔力変換率、つまり魔力親和性が異常なほどに高いことはわかっていたが、あれほどだとは思わなかった！　俺も「きっかけ」は与えてやったが、それでも、それだけで魔王と戦うことをあれほどまでに現実的に体験するとは思わなかった。俺の魔王との戦闘シミュレーションのほんの一部を意識の中に放り込んだだけなのに、それだけで、あいつは俺のシミュレーションを超える出来の、さらに現実的なシミュレーションにまで発展させた。これはつまり、魔法の使い方が上手いということ、魔力変換率が高いということだ。それも、俺をはるかに超えるほどにまで。

　青年は余りの興奮に顔がにやけてしまっていた。爽やかとはとても言えないような笑顔。しかし、嬉々とした感情だけは嫌でも伝わってくるような笑顔。

「我が選択に、間違いはなし！」

　青年は思わず叫んだ。

○　○　○

「魔王様、御調子は如何ですか？」

　チャイオニャが恭しく言った。

「なかなか良い。さすがだな、チャイオニャ」

「勿体ない御言葉」

「しかし、趣味は悪い。我は好かんな」

「勿体ない御言葉」

　先と全く同じことを恭しく言うチャイオニャに、魔王はふっと微笑んだ。

「チャイオニャ。我には貴様が未だに我が下にいることが不思議に思える。それほどに貴様は有能であり、それをしてもおかしくないような性格をしている」

「私が魔王様を裏切るなど、ありえませんよ」
「どの口が言う」
「生憎、私には口がございませんので――しかし、言わせてもらいましょう。私が魔王様を裏切るなど、ありえないと。統一戦争でのことは、良く覚えておりますから」
「あれか」
魔王は楽しそうに笑った。
「あれは面白かった。確か、あの頃は魔族も様々な場所に分かれていたんだったな」
「左様でございます。しかし、魔王様がこの世に生誕してからは、全てが変わりました」
「ああ。まず近くにあった――あそこは誰が治めていたか、確か、ゾォルだったか。それとゾォルと手を組んでいたルイアが治めていた場所を征服した。どちらもやはり、強かった。さすがは現第六と第八と言ったところか」
「そう言えば、現将軍は全てあの頃にそれぞれ魔族を治めていた者たちでありましたか」
「そうだ。人間のような、ほとんど同種ではなく、多種多様に分かれる魔族を治めていたのだ。そこには一定以上のカリスマ性と、それだけを治めることができる力を持っていると私は考えたのだ」
「はて。確か、シャム殿が提案したのではありませんでしたかな」
「……シャムは助言しただけだ。別に、提案したわけじゃない」
魔王はいじけたように口を尖らせた。チャイオニャは慌てたような素振りを見せ――わざとらしく見せ、言った。
「これはこれは申し訳ありませんでした魔王様。失言でした。どうかお許しを」
それを見て魔王は溜息を吐いた。
「だから、我は貴様が何時裏切るのやらと思っているのだよ」
「いやいや。私のような者こそ、忠臣であったりするのですよ」
「嘘を吐け。本当に、もし我がそのようなことを認めぬ王であった

のなら、貴様は殺されていてもおかしくないぞ」
「だからこそ、私は貴方様に仕えているのですよ。おそらく、他の者たちも」
魔王は突然の言葉に少し驚いた。その間もなく、チャイオニャは続ける。
「確かに貴方様は強い。最強の名がふさわしいでありましょう。しかし、私たちはそれだけで貴方様に忠誠を誓うわけがございません。魔族は誇り高い者が多く――もちろん、私を含めて――そのような者たちが自分の意に沿わぬ主に仕えましょうか。いや、仕えるはずがございません。それくらいならば自ら命を絶つ者ばかりでありましょう。そして、私たちは生きて、貴方様に仕えている。それは貴方様の強さにではなく、貴方様自身に惚れたからでございます。その雄姿に魅せられて、私たちは貴方様に仕えることを心に決めたのです。私が皮肉を言ったくらいで殺すような者に私の主が務まるはずがありません。私は、貴方様のような、器が広く――いえ、これは建前でしょう。私は、貴方様の、全てに惚れた。その強さも、心も、御姿も――その全てに。ですから、私が貴方様を裏切るはずがないのですよ」
チャイオニャは真摯に言った。
「……わかった」
魔王は感心したように言った。
「貴様。我に嘘が通じるはずがないことなど、知っておろう？」
魔王の右目になにやら紋様が浮かんでいた。チャイオニャは笑った。
「ははは。私如きの頭を覗いても、何も面白くはございませんよ」
「良かろう。我が魔法の一端、受けるが良い」
魔王はばっと手を振るい、同時に魔王の手から魔法が発動され、衝撃の波が生まれた。
地を揺るがすほどの轟音と共に、魔王の眼前には巨大な穴ができていた。しかし、そこにはチャイオニャの姿は跡形もなかった。逃

げられたのであろう。それは魔王も知っていたし、だが先ほどの魔法は必要だったのだ。おそらくこの後シャムに怒られるが、それよりも我慢ならないことがあったのだ。
「……あやつ。恥ずかしいことを、言いおって」
魔王は顔を自分の腕にうずめて、言った。
魔法の結果、チャイオニャの言葉に嘘があることはわかった。
しかし、それはほんの一部分だけであり、それ以外は全て本心からの言葉であった。
魔王はそれを思い出すと、さらに顔を深くうずめた。

「魔王様も、やはり可愛らしい御方ですね」
チャイオニャは呟いた。
「しかし、折角私が作り上げた傑作のことも少しは考えてほしいものです。私が転移魔法機能を付けていなかったら、これも壊れていたじゃありませんか」
チャイオニャはちらと自らが作り上げた傑作を見た。そこには一人の人間がいた――いや、それは、人間ではなかった。以前は人間だったかもしれないが、今は少なくとも、そうではなかった。
腹の辺りが裂かれてぱっくりと割れている。そしてそこには内臓ではなく、光る玉があった。その玉は身体に根を張り、どくんどくんと鼓動を続けていた。
その時、ゾォルとルイアから通信魔法が来た。
《実験は成功だ。お前に言われた通りの行動をしたぜ、あれ》
「そうですか。では、それは解放してください」
《解放？　何故そのようなことをするのだ》
《馬鹿かお前？　俺にはわかってるぜェ。こいつに、人間を殺させるんだろォ？》
「まあ、それもありますね。と言っても、ただ単にもういらなくなっただけですが」
《いらなくなった？　どういうことだ？》

「実験が成功したのなら、この結果を活かしてさらなるものを作るだけだから、その個体はもういらないというわけです」
《ああ、そういうことか。わかった。じゃあ、もう俺は好き勝手にさせてもらう》
「はい。結構です」
通信魔法が切れた。チャイオニャは実験の成功について何の喜びも見せなかった。自分の理論に絶対の自信を持っていたのだ。
チャイオニャは魔族であったが、魔法に理論を持ちこむようなことが多々あった。無論、魔法は感覚で使っているにすぎないが、それを理論として解析することによって、新たな魔法の可能性を模索しているのであった。そして、それを魔族のために使うことを目的としていた。
先ほどの人間だったものもその成果だ。人間の特異性、魔力の強奪とも言えるその能力を解析し、どうにかそれを活かせないかと研究した結果がこれだ。
魔族の魔法は感覚的なもの。つまりは、元々持っている能力を使っているだけに過ぎない。人間でいう、腕を動かしたり、喋ったりといった普通の行動。それがすなわち、魔族の魔法だ。故に、魔族たちは人間よりも圧倒的に早いスピードで魔法を構築することが可能であり、それは魔族が人間よりも有利であることを示している。
しかし、魔族の中には人間に敗れるような者もいる。それはその魔族が弱いというわけではなく、人間の特異性、つまりは倒した魔族の魔力を奪うことができるというものが原因だろう。無論、魔族の魔力は自然回復である。魔族にとって、魔力とは人間の体力のようなものだ。とはいっても、人間の体力とは違い、その回復にはかなりの時間を要することもある。数百年、いや数千年以上の時を生きることができる魔族からすれば人間で言う体力が自然回復するまでの時間と同程度かもしれないが、人間からすればその時間はとても長い時間である。
そして、故に、魔族は人間を恐れているのだ。

魔力の自然回復が間に合うよりも先に、人間がその魔力をどんどん高めていったのなら、それは、とても危険だ。元々の魔力量が無に等しい人間を、魔族はひどく恐れるようになった――正確には、敵と認め始めた。

しかし、それでも最初はそこまで大きな敵だとは認識していなかった。いつでも滅ぼせる敵。魔族を殺すことはあるが、魔族も人間を殺すことがあるのだから、少しならば自然の摂理に適ったことであろう。魔王はそう思って、人間を危険視し、敵視していながらも、そこまで本気で人間を滅ぼそうという気はなかったのだ。

だが、その思考は、ある時、覆された。

たった一人の人間によって。

その人間は、魔族を殺した。将軍すらも殺した。人間にはできるはずもないことをやってのけた。

それから、魔王は本格的に人間を危険視し始め、人間をこの世界から駆逐することに決めた。

そのような経緯もあって、チャイオニャはそれを作り上げた。

人間の特異性。魔族が恐れた特異性。それを活かすために、作り上げた。

人間を核とした、とある魔法兵器を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6066w/

利己主義勇者と良き魔王　序章『失われた過去』

2011年9月29日13時35分発行